

# 源氏物語評釈

若紫

五

## 第五帖 若紫 評釈

〔旧注〕以<sup>テ</sup>歌<sup>ヲ</sup>為<sup>シ</sup>卷<sup>ノ</sup>名<sup>ト</sup>也。〔手につみていつしかも見んむらさきのねにかよひける野べのわか草。「若紫」とつづきたる詞は見えず。式部卿の姫君を紫上と名づけ侍るは、藤壺の女御のゆかり尋ね出たるによれり云々。〕新紫を若紫てふことは、わかき根を用る物ならねば理聞えがたし。思ふに、伊勢物語に「春日野のわかむらさきのすり衣、とよみしは、女をたとへて「若草」といふべきを、紫草にとりかへて「若紫」といへり」と見ゆ。しかれば、此巻の名は、そのいせ物語の詞を何心なく用ひて「若むらさき」と名づけしのみなるべし。かのかいまみの事をうつつして此巻に書しにてもしるべき也。

〔玉源氏君十八歳なり。〕

〔釈〕若紫といふ名の事、ことわりをいはば新釈のごとくなるべし。然れども、これはただ藤壺女御のゆかりの紫上のわかきほどをいふ巻なれば、かの「ねにかよひける」といふ歌を思ひて、なにとなくつけしなるべし。かくて次のくれなゐの末摘花と反対にしたる也。そのよしは末摘花巻に委しくいふべし。

〔評〕此巻の発端いとゆくりか也。案に、夕顔巻の脈は末摘花巻にうけて続きたるを、此巻はなかなかかくらわはやみの事より書出られたるは、例の案外に書まぎらはして、末摘花巻と前後をとりかへてあやなされたるものによ。細流、箋などに、夕顔巻に河原院にて靈氣にあひ給ひし故にわらはやみにわづらひ給ふよしに注せられたるは、さも有べきか。されども、文のうへにはさることかすかにも見えねば、猶いかか也。さて、末摘花巻に、わらはやみにわづらひ給ひ、人しれぬ物思ひのまきれも、

上をうしるめたく思ひ給ひて、故姫君のことに転り、つひに按察大納言のゆゑよしにわたりゆく次第、いとめでたし。かくて此かいまみのさまをくはしくあらはし置たるはてに、さるはかぎりなう心をつくし聞ゆる人に、いとよう似奉れるがまもらるるなりけり、とことわりたる抑揚の勢ひ、いとつよくいみじく聞えたり。さて若草の歌などよみて、若君の打しをれ給へる所へ僧都のきておどろかしたるとぢめなど、殊によろし。其次に、かかればこのすきものどもは云々、とて、猶かの雨夜の品定の脈を引もて来られたるなども、透間なき書さまなり。あけゆく空はいといたうかすみて、といふよりは、ただ此余波をあやなして、源氏君の才と貌とのいみじきをかたるのみ文なり。さてかへり給ひて帝へ聖の事奏し給へるは、このひじりが事を結びたる所也。葵上の事は、桐壺よりこなたの例の脈也。

○藤壺宮の御事のくだり、殊にめでたしかし。この頭書にもかつがつ評せるごとく、此事上の巻巻よりそこはかとなくにははせ来りて、つひに此巻にいたりてまさしくあひ給へることをあらはされたるに、これより後は藤壺宮の悔み恐れ給ふよしをのみかかれたるなど、いとよろし。さてこれを此巻にしも顕されたるは、紫上の事のみあまりに長きを思ひて間隔したる法なるは勿論なれど、かの御かたみのゆかりを尋ね出給へるに物のまぎれの御子をはらみ給ふことを書つづけて、ゆかりの色を紫上にゆづるべき結構とせられたり。さてその末に、源氏君のおどろおどろしき夢を見給ひて、うらなふ者めしてとはせ給ふ時こたへまうしたることは、桐壺巻に高麗の相人がいへりし事のやや委しくなりもて来れるにて、やがて下の巻々の源氏君の盛衰の伏案をばやく定めてあらはしたる所也。心をつくべし。

○尼君の家をとひてたいめんし給へるは、紫上をばやく譲らせんの結構

御心のいとまなきやうにて、春夏すぎぬ、とあるは即此巻の照応にて、同年の同じ比なることをおもはせたる也。又其下に、かの紫のゆかりたづねとり給ひては、そのうつくしみに心いり給ひて、六条わたりにだに、かれまさり給ふめれば云々、とあるも此巻の照応にて、既に紫上を二条院へむかへ給ひしをしらせたる也。かくてかの末に、二条院におはしたれば、むらさきの君いともうつくしきかたおひにて、くれなゐは、かうなつかしきもありけり、と見ゆるに云々、とあるは、此巻のすゑを繼たるにて、紫と紅とを二かたにわけて反対にしたるを、ひとつに結びたる所なり。見ん人此脈にふかく心をとどむべし。いひしらず巧なる書さまにて、かいなでの人の思ひよらぬことどもおほし。

○北山のかいまみの段、なにかし僧都の僧坊をときいでて、かしこに女こそ有けれ云々、をかしげなるをうなごども、わかき人々、わらはべなん見ゆるといふ、とかきさして、さてうしろの山へ源氏君の登りて、京のかたを見給ふより、遠く須磨明石の巻をかくべき伏案をあらはされたる筆つき、いひしらずめでたし。その中に、絵にいとよくも似たるかな、又、御ゑいみじうまさらせ給はん、など絵の事よりいひ起されたるは、孟津に「須磨にて画をかき給ひしことのおこりなり」とあるごとく、かの日記をゑがき給ふべき伏線なるべし。この脈つひに絵合巻に至てほころび出たる、いひしらずをかし。又、播磨守の子の、今年蔵人よりかうふり得たる、とあるは、後に良清と見えたる人の事なるを、ここには其名をあらはさずして、はるかの後に出されたる、又その良清がことをいひさしおきて、後に明石上の媒となるべき種子を残されたるなど、すべていささかもいたづらなることなし。さて紫上をかいま見給ふ所に、先ツ雀子をとり出て、わらはべの何心なくおほどかにらうたきさまをあらはし、其雀子より尼君の後世の事にうつり、後世の事より紫

也。其後にこの尼君失給へることをいへるは、紫上のみなし子となりてものあはれなるさまをあらはし、源氏君のむかへとり給ふべき事の端をおこしたる也。且此尼君はさしも用なき人なれば、はやくうせ給へるよしに書とどめられたるなるべし。これより紫上をむかへとり給ふまでの事は、さばかりいときなき人を物し給ふなればいとむつかしきわざなるを、げにさも有べく書とられたる、例のいとめでたし。兵部卿親王の乳母がかくしたらんとのみにて、さして紫上をさぐりもとめ給はぬは、今世のさまにしてはいとふかしきほどの事なれど、其世のさまはかくてもさして難なかりしこと、惣論の所にいへる制度の事、また此前後夕顔浮舟などさまさまの人のうへをあひてらして疑ふべからず。兵部卿親王の北方のことも、後々の巻に其脈をおとさずあらはされたるを、心をつけて見るべきなり。

わらはやみ

\*源氏君

わらはやみにわづらひ給ひて、よろづにまじなひかぢなどまゐらせ

癩

病

煩

\*

呪

加持

などまゐらせ

よろづにまじなひかぢなど

孟「まじなひ」は厭術也。「加持」は真言教陀羅尼の事也。

釈「よろづに」といへるは、さまざまの呪術をつくしてせさせ給ひしをいふ也。

ある人北山になん

拾北山といふ所もあれど、これは北の方なる山也。

釈旧注に、「北山」の「なにかし寺」を鞍馬山として准拠多く挙げられたれど、例の用なければ引出す。ただそのあたりの事とのみ見てあるべし。かしこきおこなひ人

釈さまざまの修験道を行ひて行徳ある僧を云。人々まじなひわづらひしを

釈去年の夏も瘧病流行したる時、なみなみの人のまじなひかねしを、此行人は速にまじなひごめし類あまた有、とかたる也。

しじこらかしつる時は

細瘧は、しそびらかしてはあしくおちかぬるよし也。

釈「しじこる」は、縮凝の意なるべし。まじなひ損ずれば、病の縮み凝ておちかぬる意なり。とくこそ心みさせ給へ

釈はやく彼行人をめして試み給へ、と申す也。老かがりて

釈老屈して室外にもえ出ず、と行人のことわり申たる也。いかがはせん云々

釈「さらばいかにせん。よし、しのびてゆかん」との給ふ也。御ともに云々

釈御近侍のむつまじき人ばかり四五人つれて行給ふ也。ややふかう入る所なりけり

釈行人の居る所は、やや山深く入る所なり、とまづ其居所のさまをとき、次に入もておはする道のけしきをいひ、次に「寺のさま」といへり。文章次第あり。

やよひのつごもりなれば

釈三月二十日過といふ事也。必しも晦日の事にはあらず。ただ末の十日のほどを大やうにいふ例にて、前後に多し。

わらはやみ

\*源氏君

わらはやみにわづらひ給ひて、よろづにまじなひかぢなどまゐらせ

癩

病

煩

\*

呪

加持

などまゐらせ

給へど、しるしなくて、あまたたびおこり給ひければ、ある人北山

効

験

数

遍

起

賢

になん、

なにかし寺といふところに、かしこきおこなひ人侍る。こ

某

\*

行

去

ぞのなつも世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとど

年

△瘧疾

\*

厭

呪

力

ネ

サツソク

止

むるたぐひあまた侍りき。しじこらかしつる時は、うたて侍るを、

類

\*+

イヨイヨアシク

下

とくこそこころみさせ給はめ、など聞ゆれば、めしにつかはしたる

\*

試

△カノ行人ヲ召

ハヤク

下

に、おいかがまりて、むろのともまかです、とまうしたれば、い

\*

老

屈

室

外

下

\*源詞

下

かがはせん。いとしのびて物せん、とのたまひて、御ともにむつま

ウシヨウ

イイトナシ

ユカウ

呢

じき四五人ばかりして、まだあかつきにおはす。ややふかういる所

近

△北山

入

深

入

なりけり。やよひのつごもりなれば、京の花ざかりはみなすぎにけ

\*

三

月

ス

エ

り。山の桜はまださかりにて、入もておはするままに、霞のたたず

タチ

まひもをかしうみゆれば、かかるありさまもならひ給はず、所せき

ヤウモオモシロウ

△源ハマダ

ナレ

キウクツナ

御身にて、めづらしうおぼされけり。てらのさまもいとあはれなり。

珍

寺

殊

勝

峯たかくふかきいはほの中にぞ、ひじりいりるたりける。のぼり給

\*

巖

聖

入

居

ひて、たれともしらせ給はず、いといたうやつれ給へれど、しるき

令

知

テガルクシ

△源ト著

御さまなれば、あなかしこや。ひと目めし侍りしにやおはしますら

フウソク

アアモツタイナヤ

召

△御方

む。今はこの世の事を思ひ給へねば、げんがたのおこなひも、すて

方

行

法

業

わすれてはべるを、いかでかかうおはしましたらん、とおどろきさ

テ

ドウシテ

\*

タテアラフ

わぎて、うちゑみつ見奉る。いとたふときだいとこなりけり。さ

然

るべき物つくりてすかせ奉る。かぢなどまゐるほど、日たかくさし

ノマセ

加持

ウチニ

細符などなるべし。河内本には「さるべきふん」とあり。

評

大

徳

\*

き大どこなりけり」と揚たる文勢、いとめでたし。

細

符

など

なる

べし

河内本

には

「さる

べき

ふん

と

あり

さるべき物つくりて

評

大

徳

\*

き大どこなりけり」と揚たる文勢、いとめでたし。

細

符

など

なる

べし

河内本

には

「さる

べき

ふん

と

あり

すかせ」は俗に令飲といふがごとし。

若紫

五

すこし立出つ

〔釈〕かのひじりの所を少し立いでて見たたし給ふ也。そうばう

〔余〕要覧云、「韻体」云、坊区也。苑師云、坊区院也。

〔釈〕今世に寺中といふものさまなり。ただこのつづらをりの下に

をつづめてあらはしいへる法なり。〔玉〕「つづらをり」は、をれまがりたる道のさまの、黒葛のさまに似たるよりいふ名なるべし。

同じ小柴なれど

〔釈〕「こしば」は小柴垣也。垣の字おちたる歟。又かくいひても其世には垣と聞えしにもあるべし。「しわたして」といへる、すなはち垣をしわたしたる事也。屋廊などを小柴にてしたるやうに聞ゆる故に、かく注する也。

木だちいとよしあるは

〔釈〕木をきりすかしなどして、心にくくよしめきたるさまに作りたるを云なるべし。

なにがし僧都

〔釈〕「なにがし」は、この僧都の名をいふべき所なるを、例の名をかくせる物語なる故に「なにがし」といへる也。旧注に覚忍僧都とせられたるは、例のしひたる准拠也。泥むべからず。

こもり侍る

〔細〕三年禁足のよし、末にも見えたり。

〔釈〕禁足は、何ぞの行方の故ありて年をかきりてどぢこもること也。

心はづかしき人

〔釈〕かねてしり給へる人にて、聞え高く用意あるさま也。

あまりやつしけるかな

〔湖師〕「やつしける」とは、御供などもすくなくかるしきさまをとたまふ也。

きよげなるわらはなど

〔細〕女のわらははなり。尼公のわらはなるべし。

〔釈〕此御説のごとし。それを御供の人の見て「かしこに女こそ有けれ

あがりぬ。すこしたちいでつつみわたし給へば、たかき所にて、こ

△此所△

こかしこ僧坊そうばうども、あらはに見おろさる。ただこのつづらをり

△此所△

九折

のしもに、おなじ小柴なれど、うるはしうしわたして、きよげなる

下

リッパニ

浄

やらうなどつづけて、こだちいとよしあるは、なに人のすむにか、

廊

タテツツケ

木立

△アラン

とどひ給へば、御ともなる人、これ某な二なにがし僧都一の、このふた

某

二

とせ＊こもり侍るレばうレに侍るなる。心はづかしき人すむなる所にてこ

年

△下申△

△乙住

そンあなれ。あやしうもあまりやつしけるかな。ききもこそすれ、な

コトシキ

△僧部ノ吾ト

どのたまふ。きよげなるわらはなど、あまたいできて、あかたてま

浄

童

＊聞伽

つり花をりなどするも、あらはに見ゆ。かしこ彼に女こそありけれ。

彼処

僧都＊はよもさやうにはすゑ給はじを、いかなる人ならん、とくぢぐ

△女ノ居

口々

といへる也。

あか奉り花をりなど

〔釈〕仏に供する水を聞伽といふ。梵語也。

〔箋〕時花とて時々の花を仏に奉る也。

僧都はよもさやうには

〔釈〕此僧都は行法の聞えあれば、よも女をばかくしおくまじ、と也。「すゑ」とは、かくして居しむる也。

君はおこなひし給ひつ

〔新〕真言などをうけて誦し給ふなるべし。

とかうまぎらはさせ給ひて

〔細〕おこりは心にまぎることあればおこらぬ事のある也。「おもほし入る」とは、ふかく案じ入る事をいふ。

うしろの山に

〔釈〕上に「すこしたちいでて」とある所より、又その後の「はるかに高き所へうつりて京のかたを見給ふ也。旧注に「僧正が谷をいふか」とあるは、例のおしあて也。ただうしろの山とみるべし。異本「しりへの山」とあるもすてがたし。

けふりわたれる

〔釈〕「けふる」は、木芽のもえ出るをいふ也。「かすみたるさま」といへる注はわろし。

ゑにいとよくも

〔玉〕此詞、上よりのつづきは地の詞のやうなれども、地の詞のさまにあらず。これより源氏君の詞とすべし。

〔釈〕此説のごとし。但し、かくてはまたほどいふ詞の結びなし。「はるかにかすみわたる」といふ所より源氏君の詞なるべし。例の語の中にけしきをかたる法なり。旧注は「かかる所に」といふより源詞とせられたれど、ひがごと也。

かかる所にすむ人

〔釈〕かやうにけしきよき所にすむ人は心にあきたらぬことあるまじ、と也。

あがりぬ。すこしたちいでつつみわたし給へば、たかき所にて、こ

こかしこ僧坊そうばうども、あらはに見おろさる。ただこのつづらをり

のしもに、おなじ小柴なれど、うるはしうしわたして、きよげなる

下

リッパニ

浄

やらうなどつづけて、こだちいとよしあるは、なに人のすむにか、

廊

タテツツケ

木立

△アラン

とどひ給へば、御ともなる人、これ某な二なにがし僧都一の、このふた

某

二

とせ＊こもり侍るレばうレに侍るなる。心はづかしき人すむなる所にてこ

年

△下申△

△乙住

そンあなれ。あやしうもあまりやつしけるかな。ききもこそすれ、な

コトシキ

△僧部ノ吾ト

どのたまふ。きよげなるわらはなど、あまたいできて、あかたてま

浄

童

＊聞伽

つり花をりなどするも、あらはに見ゆ。かしこ彼に女こそありけれ。

彼処

僧都＊はよもさやうにはすゑ給はじを、いかなる人ならん、とくぢぐ

△女ノ居

口々

といへる也。

あか奉り花をりなど

〔釈〕仏に供する水を聞伽といふ。梵語也。

〔箋〕時花とて時々の花を仏に奉る也。

僧都はよもさやうには

〔釈〕此僧都は行法の聞えあれば、よも女をばかくしおくまじ、と也。「すゑ」とは、かくして居しむる也。

君はおこなひし給ひつ

〔新〕真言などをうけて誦し給ふなるべし。

とかうまぎらはさせ給ひて

〔細〕おこりは心にまぎることあればおこらぬ事のある也。「おもほし入る」とは、ふかく案じ入る事をいふ。

うしろの山に

〔釈〕上に「すこしたちいでて」とある所より、又その後の「はるかに高き所へうつりて京のかたを見給ふ也。旧注に「僧正が谷をいふか」とあるは、例のおしあて也。ただうしろの山とみるべし。異本「しりへの山」とあるもすてがたし。

けふりわたれる

〔釈〕「けふる」は、木芽のもえ出るをいふ也。「かすみたるさま」といへる注はわろし。

ゑにいとよくも

〔玉〕此詞、上よりのつづきは地の詞のやうなれども、地の詞のさまにあらず。これより源氏君の詞とすべし。

〔釈〕此説のごとし。但し、かくてはまたほどいふ詞の結びなし。「はるかにかすみわたる」といふ所より源氏君の詞なるべし。例の語の中にけしきをかたる法なり。旧注は「かかる所に」といふより源詞とせられたれど、ひがごと也。

かかる所にすむ人

〔釈〕かやうにけしきよき所にすむ人は心にあきたらぬことあるまじ、と也。

これはいとあさく侍り云々

〔**釈**御供の人の詞也。かやうなる所はまだ何ばかりのけしきにも侍らずといふ意を、「浅く」とはいへる也。

人のくに

〔**河**異国の事にはあらざる也。

〔**細**他国也。伊勢物語に「人の国にても、猶かかることなんやまざりける」といふに同じ。

いかに御絵いみじうまさらせ給はん

〔**箋**源氏すまにてゑをかき給ひしを、ここにいひ出したる也 弄句 ながしがしのたけ

〔**花**「ながしがしのたけ」は、惣じて所をさだむべからず。別しては浅間のたけをいふべきにや。ふじ・あさまと対していふ故也。

よろづにまぎらはし聞ゆ

〔**釈**上に「おもほしいれぬなんよき」とありし首尾。

ちかき所には云々

〔**釈**御供の中の一人が詞也。末を案するに、げにも良清が詞とはしらるれど、なほ誰ともなきさまにかたり出すが例の文法なり。

〔**湖師**「これ須磨明石をかくべき張本なり。

ゆほびかなる所に侍る

〔**釈**此詞は俗にツンポルトシタといふ意と聞えたり。旧注どもに「寛大なる心」とどかれたるは、うらうへなるひがこと也。其よしは語釈にいへり。さて、あかしの浦は何のいたりふかきおもふきはなけれど、海の面を見わたしたるけしき、あだし所とはかはりてツンポルト狭く清なる所ぞ、といふ意也。明石は前に淡路島ありて、海のおもては寛大ならぬものをや。

かのくにのさきのかみしほち

〔**釈**前の播磨守入道の事也。

〔**河**新発は、初て入「釈門」の名也。初発心の義也。経に新発意菩薩といふがごとし。

〔**釈**新発意をつづめて「しほち」といふ也。ただ新発とのみにては聞えず。俗にもシンポチといへり。

いといたし

〔**玉**「いたし」は、さしもあるまじきものの、思ひの外に、ほどよりはよきを、ほめたる詞也。他巻に見えたるも皆同じ意也。ここも播磨前守の分際には余りてよきよし也。

大臣の後にて

〔**湖師**「後」は子孫といふ心。

出たち

〔**河**出身也。身をも立、出仕をますべかりける也云々。

ひがもの

〔**玉**変なる人といふこと也。すべて「ひが」といふは、皆あるべきさまに違ひたることにて、「ひがひがし」「ひがこと」「ひがむ」など、みな其意也。

近衛の中將をすてて

〔**細**中将など宮中にて近きまもりの官こそねがふ所なるべきを、近衛をすてて国の守にならんことは頗無念の事なるべし。されば「よのひがもの」とはいふ也云々。

すこしおくなりたる山すみもせで

〔**釈**世をのがるほどならば深き山へもいるべきを、さはなくして、海づらに出ゐて住るはひがみたるやうなれど、といふ意也。「げに」は「ふかき里は云々」へ係る意なる其間に事を説く例の文法也。

かつは心をやれるすまひ

〔**玉**みづからあかぬことなしと、ほこりたるやうの意也云々。拾遺に「心をはらしやり、なぐさめんためといふ心也」といへるは、言の本の意はさることなれども、物語書に用ひたる例は然らず。

ところえぬやうなりけれ

〔**玉**いきほひもなく、嫌らぬやうにありしよし也云々。

そこひ

〔**河**幾多ソコバ日本紀。若干、同心歟。

のこりのよはひゆたかにふべき

〔**玉補**産業の事也。

〔**釈**「心がまへ」といへるが産業のこと也。入道の残生を不足なく経べき結構を十分にしたる也。田地山林など買たるなるべし。

ば、これはいとあさく侍り。人の国などに侍る海山のありさまなど

〔**注**御供詞 浅 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

を、御覽せさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせ給はん。

〔**注**富士富土の山山、なにがしの、たけなど、かたり聞ゆるもあり。またにし

の国のおもしろきうらうら、いそのうへをいひつづくるもありて、

〔**注**富士富土の山山、なにがしの、たけなど、かたり聞ゆるもあり。またにし

よろづにまぎらはし聞ゆ◎ちかき所には、はりまのあかしの浦こそ

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

なほことに侍れ。何のいたりふかきまはなけれど、ただうみのお

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

もてを見わたしたるほどなん、あやしくこと所に似ず、ゆほびかな

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

るところに侍る。かのくにのさきのかみしほちの、むすめかしづき

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

たる家いといたしかし。大臣の後にて、出たちもすべかりける人の、

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

世のひがものにてまじらひもせず。近衛の中將をすてて、申給はれ

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

りけるつかさなれど、かのくにの人にもすこしあなづられて、なに

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

のめいぼくにてか、又みやこにもかへらんといひて、かしらおろし

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

侍りにけるを、すこしおくなりたる山すみもせで、さる海づらにい

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

であたる、ひがひがしきやうなれど、げにかの国のうちに、さも人

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

のこもりぬべきところどころはありながら、ふかきさとは人ばな

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

れ心すごく、わかきさいしの思ひわびぬべきにより、かつは心をや

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

れるすまひになん侍る。さいつころまかりくだりて侍りしついでに、

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

ありさま見給へによりてはべりしかば、京にてこそところえぬやう

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

なりけれ。そこらはるかに、いかめしうしめてつくれるさま、さは

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

いへど、国のつかさにてしおきける事なれば、のこりのよはひゆた

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

ありさま見給へによりてはべりしかば、京にてこそところえぬやう

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

なりけれ。そこらはるかに、いかめしうしめてつくれるさま、さは

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

いへど、国のつかさにてしおきける事なれば、のこりのよはひゆた

〔**注**御供詞 人ヨソノの国などに侍る海山のありさまなど

法師まさり

玉補桐壺巻に「あげおどり」といふ詞の類にて、法師になりてより人からのまさりて見ゆる事をいふなるべし。

代々の国の司など

細 諸国の守は一任四ヶ年にてかはる故に「代々」とはいふ也。さやうの任におもふく人の心をかはすものあれど、うけひかぬと也。

釈 「用意殊にして」は、心もちゑを殊更にして也。「心ばへを見ず」とは、志の深きを女に見する也。「心ばへ」は心延也。猶心差といはんがごとし。この人ひとりにこそあれ

湖 我子は此明石上一人なれば、この人をだにいたづらになさじとの心也。思ふさまことなり

釈 さやうに受領の妻などにせんなどは、思ふ様通に異也、との意也。禁中へ奉らんなどの意なるべし。細流に「夢の告あるによりて云々」とあるは、同じことながら、この注にはかなひがたし。

もしわれにおくれて

釈 もし我死て、汝おくれ残りつつ、其志もえとげず、思ひ定めたる事たがひなば、海に身をなげよ、といふ也。

おもひおきつる

玉 つねに掟字を書いて、「おきて」といふ詞を用言にいへる詞にて、事をかやうかやうと定むるなり。物語に此言いと多きを、「置て」「置つる」とまぎらはしきこと有。心得おくべし。

つねにゆるごんしおきて

釈 平生に、なからん後の遺言を為置て侍り、とかたる也。

海童王の后に

細 只海に入ねといふによりての取合せ也云々。

釈 此御説のごとく、入道が「思ひ掟つるすぐせたがはば、海に入ね」と遺言せるにつきて、然らば大かた其遺言のごとくにはなるまじければ、海に入て童王の后になるべきいつき女ならん、入道が心高きの聞ぐるしや、とて人々笑ふ意なり。さて海童王といふ名は仏家にいふことなれど、旧注婆羯羅の梵語の釈はここによしなし。

かくいふは

釈 「かくいふ」とは、此あかしの新発意のむすめの事を語りたる人をさしていへり。

藏人よりことしかうふりえたる

花 正月五日の叙位に、六位の藏人はかならず巡爵とて従五位下に叙せらるる也。「かうふり」とは爵の事也。

かの入道のゆるごんやぶりつべき

釈 この物語する五位の藏人、好色者なれば、かの入道が心高き遺言をやぶりて、わが物とせんのはあらん、と戯れていへる也。「たたずみよる」は「立よる」といはんがごとし。この藏人は後に良清と見えたる人の事なるを、ここには名をあらはさずして、遠くその縁を伏せおかれたる、いひしらずたくみなり。

いでやさいふとも云々

玉 「をさなくより云々したがひたらんは」「あなかびたらん」と、上へかへる意の語也。

釈 「母こそゆゑ有べけれ」「あなかびたらん」とつづく意也。又「ははこそゆゑ有べけれ」「をさなくより云々」ともめぐりてつづく意ともすべし。かく定まらずめぐるさまなるは、此文章の例の法也。心をつけて味はふべし。

ははこそ云々

玉 細流に「良清が詞也」とあるは、いかが。下に「いふもあり」とあれば、又一人がいへる也。「いでや」といふよりつづけて、同人の詞にてもあるべし。

よきわかうどわらははなぐ云々

釈 「いでや」といふより「故あるべけれ」まで同人の詞也。さてここより「もてなすなれ」までは藏人の詞也。其故は、これより上はあなかびたらんとおしはかりてもごく意、ここよりはさはあらじといひとく意なれば也。さて「なまけなき人に」といふより又一人が詞なるべし。又いひもどく意のある上に「いふもあり」といふ語、藏人とは聞えねば也。さてこの意は、むすめの心いやしくならぬために、よきつかひ人どもを京の貴きあたりより類にふれて呼下してめしつかふ、と也。「類にふれて」は縁にしたがひてといふ意、「まばゆくもてなす」はまばゆくほどにかしづく意也。

かにふべきところがまへも、十分二になくしたりけり。のちの世のつとめ

も、いとよくして、カヘツテなかなか法師まさりしたる人になん侍りける、

と申せば、源さてそのむすめはとどひ給ふ。間けしうはあらず、かたち

心ばせなど侍るなり。イキ代々のくにのつかさなど、用よいいことにして、殊

さる心ばへみすなれど、△テサウ乙さらにうけひかず。ミセルわが身のかくいたづら

にしづめるだにあるを、△世三この人ひとりにこそあなれ。サヘニ思ふさまこと

なり。△入ノ思フト△もしわれにおくれて、△イあれンその心ざしとげず、△ムスメこのおもひおきつ

るすぐせたがはば、タシアハセ海にいりねと、違つねにゆるごんしおきて侍るな

ど聞ゆれば、と君もをかしときき給ふ。海人々、龍かいりうわうのきさき

になるべきいつきむすめなり。畜心だかさくるしやとてわらふ。高か

くいふははりまのかみのこの、播磨守子藏人より、今年ことしかうふりえたるな

りけり。好色いとすきたるものなれば、遺言かの入道のゆるごんやぶりつべ

き心はあらんかし。ソコテウカガヒヨルさてたがみよるならん、△御供ノ人々といひあへり。イヤモ

やさいふとも、ウサウあなかびたらん。①田舎をさなくよりさる所におひいでて、生

ふるめいたるおやにのみしたがひたらんは、古ははこそゆゑあるべけ②幼

れ。③よきわかうどわらははなど、若人童女みやこのやんことなき所々より、タフトキる

なまけなき人になりゆかば

〔玉〕河海細流などに「後々の国司の事」とあれども、もし其意ならんには、ただ「なまけなき人になりゆく」といひては聞えぬこと也。「一本には」なりてゆかば」と、てもじ有によらば、良清などが、なまけなきものになりて、おしてのぞまば、といふ意かとも思へども、それも「ゆかば」といふ詞、心ゆかず。又思ふに、になりはくだりを写誤れるにて、国司にまれさらぬ人にまれ、情なくおしたちたる人の、かのくににくだりゆかば、おしてのぞむべきほどに、といへるか。

〔釈案に、「只今こそ云々、まばゆくもてなすなれ、おやなどなくなりてなまけなき人になりゆかば、うしろむる人もなく、さやうにこころやすくしてはえおくまじ」といふ意にや。とにかくに、他人のなまけなきが、望みにゆく意とは聞えず。猶考ふべし。

君は何心ありて云々

〔釈〕入道何の心ありてさやうに海に沈めよとまでは遺言するならん、といふ意なるを、縁語にてあやなしたる也。「ふかく」は海の縁、「みるめ」は海松なるを、「見る目」といひなす例也。

〔玉底の見る目もきたなき所なるべきに、何とて海のそこまでは思ひ入て海に身をなげよとはいふらん、といふ意也。引歌無用。かやうにても

〔釈〕かやうにはのたまへども、の意なり。もてひがみたる事

〔新葵上・六条御息所などのやんことなきかたにはうとくて、夕顔のか様のやつれたるに心入れ給ふをいふならん。

〔釈〕「なべてならず、もてひがみたる」とは、一とほりならず変なる事を好み給ふといふ意也。くれかかりぬれと

〔釈〕こより御供の詞也。玉小櫛に「どはばの誤りか」とていはれたる説あれど、かやうの所は上にもたびたびありし文法にて、日のくれかかりたるを御供の人の語中につづめていへる也。さて下にどあるをといへるあるの詞、すこしいかが。いふをどあるべき所なり。

御物のけなどくははれる  
〔釈〕「くははれる」とは、わらは病の上に物のけの加ははれる也。

〔細〕「御物のけなどくははれる」とかけるも、夕がほの巻よりの心をあらはして、殊にその余情あるにや。ゆふぐれのいたうかすみたるに

〔細前〕に坊などある所なれば、人目をしのび給ひて夕暮のかすみたるに立出給ふ。用意あるさまなり。ただこの西おもてに

〔玉〕かやうの「ただ」は、今の俗言に「直に」といふこと也。持仏すゑ奉りて

〔岷〕幼年などより一心にたのみておこなひられたる本尊をいふ也。此僧坊の西面なる所に持仏をすゑて行ふさま也。

〔釈〕此「なりけり」は、上に「きよげなるわらはども、あまた出きて云々、かしこに女こそ有けれ云々」といへる所をうけて、かの女などの見えたるは此尼のつかふ人なりけり、といふ意か、又は、此小柴垣のあるじは尼也、といふ意などか。されど猶穩ならず。案に、「ありけり」とありしを写し誤れるにや。すだれすこしあげて

〔釈〕こより内のありさまをくはしくいへり。源の見給ふ心よりいふ詞とみるべし。花たてまつる

〔岷前〕にわらはの花をとありし也。中のはしらに

〔釈〕中柱、空蟬巻にみゆ。いとなやましげに

〔湖〕病者のさま也。尼君

〔釈〕「ただ人に見えず」といはんとて、君の字をそへたり。やせたれどつらつきふくらかに

〔釈〕瘦たれど、頬骨のあらはれたるなどのさまにはあらぬなるべし。今めかしき物かなと

〔釈〕源氏君のかいまみ給ふ心中より内のさまをいへる文法なる故に「物かな」といへる、上文の例なり。心をつくべし。

いにふれてたづねとりて、まばゆくこそもてなすなれ。なまけなきヨリニシタガヒテ

人になりゆかば、さて心やすくてしも、えおきたらじをや、などいイテ

ふもあり。君は何心ありて、うみのそこまでふかう思ひいるらん。サウシテ

そのみるめものむつかしうなどの給ひて、ただならずおもほし△コンアラズ

たり。かやうにても、なべてならず、もてひがみたることこのみ給△明有女三毛耳

ふ御心なれば、御みみとどまらんをやと見奉る△ユカシウ

おこらせ給はずなりぬるにこそはあめれ。はやかへらせ給ひなんと△癡

あるを、大とこ、御物のけなどくははれるさまにおはしましけるを、△山

こよひはなほしづかにかぢなどまゐりて出させ給へと申す。さもあ△山

ることとみな人申す。君もかかるたびねもならひ給はねば、さ御供也

すがにをかしくて、さらばあかつきにとの給ふ。日もいとながきに、オモシロク

つれづれなれば、ゆふぐれのいたうかすみたるにまぎれて、かのこ△婦ラン

しばがきのもとにたちいで給ふ。人々はかへし給ひて惟光ばかり御御供

ともにてのぞき給へば、ただこのにしおもてにしも、ち仏すゑ奉り△垣内ヲ

て、おこなふ尼なりけり。すだれすこしあげて花たてまつるめり。チキニ

なかのはしらによりゐて、けうそくのうへに絛をおきて、いとなや△西面

ましげによみぬたる尼君、ただ人と見えず。四十あまりにていとしイばかり

ろくあてに、やせたれどつらつきふくらかに、まみのほど、かみの△類

うつくしげにそがれたるすゑも、なかなかながきよりもこよなう今△髪

美

貴

中

小

きよげなるおとなふたりばかり

中ニに十ばかりにや云々

白キきぬ山ぶぶきなどの

花はな裏山吹の衣は、表黄、裏紅也。花山吹は、表薄朽葉、裏黄也。

積せきなどといへるは、かいまみ故にたしかに見とめぬさまをしらせたる詞也。

おひさき見えて

積せき生立てゆくさきうつくしからんと見ゆる也。

あふきをひろげたるやうに

積せき髪かみの末すえのほそらずして、ふさやかにひろがりたるかたちをたとへていへるなり。

あかくすりなして

細こなきなどして顔をすりたるさま也。

すすこおほえたる所あれば

積せき藤壺と紫上と似たる事をいはんとて、まづ尼君に似たるよしをいへる、いとたくみ也。

すずめの子を

積せき時はやよひのつごもりがたなれば、雀すずめ子のやうやう巢立ねたてするころなるべし。

評ひょう此段尼君の種姓を語り出んにつきなれば、まづ雀子をとり出て種子としたるたくみ、いとみじ。これより尼君に似つかはしき後世の事になりて、つひに故姫君のうへにおよぶついで、心をつけて味はふべし。

いぬきが

河上東門院の上童に此名あり。栄花物語に見えたり。此物語には「あてき」「なれき」などあり。「き」は「公」の字なり。又「君」の字也。世俗に「あねき」「をばき」などいふは「姉君」「伯母君」といふ心也云々。

ふせふせせのうちの

玉たまここは寺なれば、鳥をいる籠などはなき故に、かりにふせふせせにいられたる也。

れいの心なしの云々

河か常じょうに心なく鹿相なる者の、かやうの事をして折檻せらるる事よ、と

めかしき物かな、とあはれに見給ふ。きよげなるおとなふたりばかり、さてはわらはわらわははべべぞいでいりあそぶ。中ちゆうに十ばかりにやあらんと

みえて、しろうきぬ山やまぶきなどのなれたるきて、はしりきたる女おんなこ、

あまた見えつることもにるべうもあらず、いみじうおひさき見え

て、うつくしげなるかたちなり。かみはあふきをひろげたるやうに、

ゆらゆらとして、かほはいとあかくすりなしてたてり。なになにごどぞ

や。わらはべとはらだち給へるかとて、尼君の見あげたるに、すすこ

しおほえたる所あれば、ここなめりとみ給ふ。すずめすずめのこをいぬきが

ににがしつる。ふせふせせこのうちにこめたりつるものを、とていとくちを

しとおもへり。このみたるおとな、れいの心なしの、かかるわざを

して、さいなまるるこそいと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬ

る。いとをかしうやうやうなりつるものを。からすなどもこそ見つ

くれ、とてたちてゆく。かみゆるらかにいとながくめやすき人なめ

り。少納言のめのとぞ人いふめるは、この子のうしろみなるべし。

尼君にぎみいであなをさなや。いふかひなう物し給ふかな。おのがかくけ

ふあすになりぬるいのちをば、なにともおぼしたらで、すずめすずめした

ひ給ふほどよ。つみうることぞとつねに聞ゆるを、こころうくとて、

こちやといへば、ついあたり。つらつきいとらうたげにて、まゆの

わたり打けふり、いはけなくかひやりたるひたひつき、かんさしい

みじううつくし。ねびゆかんさまゆかしき人かな、とめとまり給ふ。

大人二人

童女出入

白衣

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

髪

さるはかぎりなつ心をつくし聞ゆる人に

〔細〕藤壺によく似たる也。をば・めひ也。

〔評〕ここにいたりて、はじめて藤壺に似奉りたることをあらはされたり。

藤壺と紫とゆかりに似かよひたる伏案の前後をふかく味はふべし。

涙ぞおつる

〔評〕此一語、ことにゆきたらひて事の心をつくせりといふべし。

うしろめたけれ

〔釈〕紫上の物はかなきをおきて此世をさらばなど思ふにつけて、うしろめたきなるべし。

かばかりになれば

〔細〕よのつねの人は、十ばかりにもなればおとなしやかなる物を、此君はいとけなくまします、と也。

こひめ君は

〔細〕紫上の母也。按察、大納言におくれ給ひし事也。

〔評〕尼君の物語の中に紫上の父母のゆゑよしを顕し出せる省筆の法、いとめづらしくめでたし。

すすろにかなし

〔玉〕さもあるまじき事に、何故となく、おほえずかなしき也。

ふしめになりて

〔玉〕「ふし」はなえふすにて、目つきのしをるる也。俗言に「しをしを」として」といふ意也。

こぼれかかりたる髪

〔評〕上に「髪は扇をひろげたるやうに」といひ出て、「ひたひつき、髪さし」といひ、又「髪をかきなでて云々」といひて、ここに「こぼれかかりたる」といへる、首尾つらぬきてめでたし。

おひたたん云々

〔新〕生立て、有べき方もしらぬ若子を見捨んことのおほつかなきに、命の終らんにも終らん様なき心ちする、といへり。「ありか」は在所にて、ここは末の手著をいふ云々。「露」は、わか草よりいでて消んといはん料にて、命をたどへたり。「空なき」とは、心まどひして物のかたもしられぬをいふ。又あるおとな

〔玉〕少納言にはあらず。上に「おとな二人」と有て、少納言が事は「このゐたるおとな云々」とて上に見えたるに、「又ある」といへるは、今一人のおとな也。「又」といふを歌へかけて、「あるおとな」又よめる」といふ意ともすべけれど、少納言は既に「立てゆく」とあれば、ここに「ある」とはいふべきにあらざるをや。はつくさの云々

〔新〕若草のおひゆく末を見さだめんまでは、御心づようなりてながらへ給ふべきにこそあれ、いかで消んなどはたまふぞ、といさむる也。若草・初草は同じ事なれば、いせ物語にもたがひによめり。あなたより

〔釈〕僧都の坊は、この尼君のおはする西面なる所よりはおくまりたるあなたさまに有と見えたり。故に「あなたより」といへり。けふしもはしにおはしましける哉  
〔釈〕目も多かるに、今日しも端つかたにおはしけることかな、さてさてかるがろし、といふ意也。しもといひかなといふ詞のあぢはひ、すべてかくのごとし。

ここに侍りながら

〔湖〕我此山に在ながら、御見廻も申さるることよ、と也。

此世にののしり給ふ光る源氏

〔玉補〕此詞いか。「ののしられ給ふ」とか「ののしり侍る」とか有しを誤れるか。「ののしる」とは、かしがましく評判するを云也。

\* さるはかぎりなう心をつくし聞ゆる人に、いとよように奉れるがまも似 藤ッボ ミツ

らるるなりけり、と思ふにも涙ぞおつる。あま君かみをかきなでつメラレル △カク兒乙 撫

つ、けづる事をばうるさがり給へど、をかしの御ぐしや。いとほかト ウツクシ 髪 シカ

なうものし給ふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、トセス キニカカレ コレホド

いとからぬ人もある物を。こひめ君は、十二にてとのおくれ給カウハナイ 殿 後

ひしほど、いみじうものは思ひしり給へりしぞかし。ただ今おのれ己

見すて奉らば、いかでよにおはせんとすらん、とていみじうなくを、世

見給ふもすすろにかなし。をさな心ちにも、さすがにうちまもりて、源 ナニトナシニ サウハ云モノノ△尼君乙 ミツメテ

ふしめになりてうつぶしたるに、こぼれかかりたるかみ、つやつや伏目 備 髪

とめでたう見ゆ。

\* おひたたむありかもしらぬわか草をおくらす露ぞきえんそらな\*尼君 生立 在 廻 後ラカス

\* またあるおとな、げにとうちなきて、居 大人 ナルホド

はつくさのおひゆくすゑもしらぬまにいかでか露のきえんとすら\*おとな

ん。と聞ゆるほどに、僧都あなたよりきて、こなたはあらはにや侍ウチ 詞 此方 顕露

らん。けふしもはしにおはしましけるかな。このかみのひじりのか今日 端 兄 聖

たに、源氏の中将の、わらはやみまじなひにものし給ひけるを、た方 癡 病 呪 来リ

だいまなんききつけ侍る。いみじうしのび給ひければ、えしり侍ら

で、ここに侍りながら、御とふらひにもまうでざりける、とのたま\* 此廻 △コトヨク

へば、あないみじや。あやしきさまを人やみつらん、とてすだれお尼君詞 フツガフナ 藤 下

ろしつ。このよにののしり給ふひかる源氏、かかるついでに見奉り\*僧都詞 カヤウナビンギ

世のうれへむすれ

〔釈〕源氏君のかたちをほめたる例の脈也。世をすてたる僧なれども、此君をみれば、愁を忘れ命を延るやうに覚ゆる、といふ也。

かかればこのすきものどもは

〔釈〕「この」は、例のかのといふ意也。「すきもの」は、兩夜に品定せし人々をさしていへる也。さてこの意は、源氏君のたまさかに立出給ふだにかく案外にうつくしき人を見給ふに、かのすき物どもは身軽くしてあけくれかやうなるありきのみすれば、よにかくれたる人をも見つくる也、とかの人々の物語のさまを感じ給ふよしなり。

〔評〕これ帚木の照応をこの巻にうつしきて引たる脈也。心をつくべし。

さてもいと

〔玉〕此「さても」は、俗言の「さても」のごとし。雅語にはめづらしきつかひざま也。

〔釈〕なほ雅語のつかひざまにて、訳注のごとき意也。

かの人の御かはりに云々ふかうつきぬ

〔釈〕「かの人」は藤壺也。藤つぼといはずしてしか思はせたるは、例の脈也。かくて此所にて紫上を藤壺の御かはりにとあらはし出たる結構、いとめづらし。ふかしといふ語に心をつくべし。此人源氏君に対へたる第一の御方なる故なり。

よきりおはしましけるよし

〔玉〕すべて「よきる」といふ言は、よきて過る意と聞えたり。こども其意にて、僧都の坊へは立よらず過給へるをいふなるべし云々。さて又「よきる」といふ言は、物語書などにはをさをさ聞なれぬを、こころはほうしの語なる故にいへり。

給はんや。世をすてたる法師のこちにも、いみじうよのうれへ忘愁

れ、よはひのふる人の御有さまなり。いで御せうそ消息こ聞えん、とて

たつおとすれば、かへり給ひぬ。あはれなる人を見つるかな。かか源心

ればこのすきものどもは、かかるありきをのみして、よくさるまじカノ好色人

き人をも見つくるなりけり。たまさかにたちいづるだに、かく思カノ好色人ひ

のほかなることをみるよ、とをかしうおぼす。さてもいとうつくしサウハイフテモ

かりつるちごかな。なに人ならん。かの人の御かはりに、あけくれ藤ツボ

のなぐさめにも見ばや、と思ふこころふかうつきぬ。うちふし給へ朝暮

るに、僧都の御弟子、これみつをよびいできます。ほどなき所なれば、惟光

君もやがて聞給ふ。よきりおはしましけるよし、ただいまなん人まスゲニ

うすに、おどろきながらさふらふべきを、なにがしこの寺にこもり玉補「る」はりを誤れり

侍るとは、しろしめしながら、しのびさせ給へるを、うれはしく思実名ライフベキ処也

ひ給へてなん。草の御むしろも、この坊にこそまうけ侍るべけれ。△スケニ サンジャウス

いとほいなきこと、と申給へり。いぬる十よ日のほどより、わらは源詞惟光伝ふる也

やみにわづらひ侍るを、たびかさなりてたへがたう侍れば、人のを△カヲ

しへのままに、にはかにたづね入侍りつれど、かうやうなる人の、コロ

しるしあらはさぬ時、はしたなかるべきも、ただなるよりはいとほ凡

しう思ひ給へつつみてなん、いたうしのび侍りつる。今そなたにも、△参テ申

とのたまへり。すなはち僧都まゐりたまへり。法師なれど、いと心フツガフナル

はづかしく、人がらもやんことなく、世に思はれ給へる人なれば、

すなはち僧都参り給へり

〔釈〕源氏君の隔意なきを聞いて、即刻僧都源氏君のかたへ参られたる也。これ当然の礼なり。

かるがるしき御ありさまを

**釈** 僧都心はつかしく用意有て、かつ世にも尊く思はれたる人なれば、あまりにかるがるしくやつれ給へるを、源氏のはぢ給へる也。こもれるほどの

**釈** 禁足の間の事どもをかたり給ふ也。おなじ柴のいほりなれど

**釈** こもかしも同じ草庵なれど、と也。

**細** 「涼しき」とは、時節にかぎらず水の清くすずしげなるを云也。僧都のもとへ源氏を申入れんとてのたまへる詞也。

まだ見ぬ人々

**玉** 源氏君をまだ見ぬ人々也。

**孟** 前の柴垣のかいまみの時、「この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見給はんや」などといひしを聞て、はぢらひ給へる也。

あはれなりつる有さまを

**釈** 紫上也。

同じ木草をもうゑなし

**釈** 山におひたると同じ木草をもさるかたに植なして、見所あるさまにつくりたる意也。「うゑなし」といへるに心をつくべし。

やり水にかがりびともし

**釈** 遺水ヒナミヅの上に篝火をともし、灯籠にも火をともしたる也。上に「火」といへる故に、下にははぶけり。

そらだきもの

**新** 式に此書の法あり。

**花** 仏に奉る香を名香といふ。牛頭・梅檀など名ある香をいふべし。君の御おひかせ

**湖** 源のたきしめ給ふ御衣の匂ひ也。

**釈** 「おひ風」とは、うしろよりふく風をいふが常なれど、ここは御衣にしめ給へるたきものの香の、あゆみ給ふ跡に残ることを転じていへりときこゆ。さて、源氏君のかをりは名香にもまさりて異なり、と也。

心づかひ

**釈** 「心づかひ」とは、つきなくは思はれじと用意する事也。

よのつねなき御物語云々

**細** 源に説きかせ申さるる也云々。すべて僧は、俗に対しては必無常の

法理を演説するを礼儀とすべし。

**釈** 礼儀までもあらざるへし。ただこの比の世のならはし也。わが御つみのほど

**孟** 源の心中、藤壺の事をふくめり。

**釈** 孟津のごとくなるべし。「あぢきなき事に心をしめて」とある詞、ただ世のつねのごとは聞えねば也。

まして

**玉** 「いけるかぎり云々」に對へて、「まして後世は」なり。

かやうなるすまひも

**釈** かやうなる山ずみもして、世をのがれまほしうおぼえ給ふ物から、屋の紫上のおもかげ、心にかかる、と也。

たづね聞えまほしき夢を云々

**湖** 師「いひ出んもたよりなきに、まことならぬ夢がたりをす」と伊勢物語にいへる類也。

**釈** ここに物し給ふ人をたづねまほしき夢を見たりしを、けふここに來て思ひ合せたり、との意也。

うちわらひて云々

**釈** 源氏君のそら夢がたりを僧都のさとりしをしらせて、「打わらひて、打つけなる云々」と書たる也。

故按察大納言

**孟** 尼公の夫、紫上の祖父なり。

**釈** 大納言にて陸奥出羽の按察使を兼たる人也。按察使をつづめてアゼチとはいふ也。

かるがるしき御ありさまを、はしたなうおもほす。かくこもれるほ源部 フツガフニ アビ

どの御ものがたりなど聞え給ひて、おなじしばのいほりなれど、す柴 源心

こしすずしき水のながれも御覽ぜさせん、とせちに聞え給へば、か源心 ネンゴロ

のまだ見ぬ人々に、ことごとしいひきかせつるも、つつましようおイを ハヅカシウ

ぼせど、あはれなりつるありさまもいふかしくて、おはしぬ。げに紫上

いと心ことによしありて、おなじ木草をもうゑなし給へり。月もな

きころなれば、やり水にかがり火ともし、とうろなどにもまゐりたイセ 火籠 火ヲ

り。南おもていときよげにしつらひたまへり。空だき物心にくくかトリックロヒ

をりいで、みやうがうのかなどにほひみちたるに、君の御おひ風い名 香 香

とことなれば、うちの人々も心づかひすべかめり。僧都世のつ別 常

ねなき御物語、後の世の事など聞えしらせ給ふ。我御つみのほどお源心 罪

そろしう、あぢきなきことに心をしめて、いけるかぎり、これを思フアンバイナル 令染 生 涯 コノコト

ひなやむべきなめり。ましてのちのよのいみじかるべきを、おぼし懺 況 罪

つづけて、かやうなるすまひもせまほしうおぼえ給ふ物から、ひイカヤウ 山居ノコト也 昼

るのおもかげ心にかかりてこひしければ、ここに物し給ふはたれに源詞 オハシマス

か。たづね聞えまほしき夢を見給へしかな。けふなん思ひあはせつ待 待

る、と聞え給へば、うちわらひて、うちつけなる御ゆめがたりにぞ僧部 詞 サツキヤク

侍なる。たづねさせ給ひても、御心おとりせさせ給ひぬべし。こあ故 按

ぜちの大納言は、世になくてひさしくなり侍りぬれば、えしろしめ察使 亡 源

さじかし。その北の方なん、なにがしがいもうとに侍る。かのあぜ拙 僧 女弟

たのもし所に云々

〔**釈**〕僧都ここにこもりて京へも出ねば、それをよきたのみ所として尼君の来り住侍り、と也。

聞給へしは

〔**釈**〕此下にいかにといふ詞をそへて心得べし。

おしあてにのたまへば

〔**釈**〕此語おもしろし。源氏君は、紫上を尼君の子とおぼしよりたれど、実にはしらがたければ、おしあてにいひ試み給ふ也。

むすめただひとり

〔**湖**〕僧都は紫上の事とはしり給はねば、尼公のむすめ、紫上の母の事をこたへ給ふ也。

すぎ侍りにしかば

〔**湖**〕大納言死去ありし也。

いかなる人のしわざにか

〔**釈**〕いかなる人のしわざにてか、媒して兵部卿宮しのびてかたらひ給ひし、と也。此所物論にいへるごとく、その世のさまなればいふかしむべからず。

もとの北のかた

〔**釈**〕兵部卿宮の本台也。此人の事、末々に見えたり。「やすからぬ事」は嫉妬にて、くるしき事多かりしよしなり。

なくなり侍りにし

〔**釈**〕紫上のはは君、身まかり給ひし也。

物思ひに病づく物と

〔**細**〕僧都の詞、奥あり。法師などは、物に貪着のなき故、かく思ふもことわり也。

〔**釈**〕世に物思ひにて病づくといふことを眼前に見たり、と也。さらばその子なりけり

〔**岷**〕源の心。尼公の子かと紫を思ひたれば、孫にて有けるよ、とおとしつけ給ふ也。

かの人にもかよひ聞えたるにや

〔**細**〕兵部卿の御筋なれば、藤壺ども余所ならぬによりて似かよひ給ふと思ひ給ふ也。

〔**釈**〕藤つばは兵部卿の宮の御妹なり。

人のほども

〔**湖**〕師宮の御むすめなれば也。

〔**釈**〕「をかしう」の下、すこし詞のたらぬこちす。落たるか。

中々のさかしら心なく

〔**玉**〕まだをさなくはあれども、さかしら心なくて、それもかへりてよからん、の意なり。「さかしら」は、かしこたて也。

〔**釈**〕「中々」の意、小櫛のごとし。但し、ここは「中々の」と体言にいへれば、ナマナカ・ナマジヒなど訳してかなへり。

とどめ給ふかたみ

〔**釈**〕此世にとどめ置給ふ忘れがたみの子といふ意也。

をさなかりつるゆくへの

〔**玉**〕「ゆくへ」は僧都の物かたりの末也。

〔**釈**〕をさなかりつる人のゆく末といふ意也。「かりつる」といふ詞、過去なれば、ひるまのかいまみに見たりし時の事を思ひ出給へることと聞ゆ。小櫛少したがへり。

なくなり侍りしほどにこそ

〔**釈**〕紫の母上のなくなり給ひしをりからに、女子一人うみ給ひしよし也。「侍りし」とあるは、産給ひしこと也。

それにつけても

〔**釈**〕その女子の事につけても也。「物思ひ」は尼君の也。

よはひの末に

〔**釈**〕尼公の老のよはひの末に思ひなげかる、と也。

さればよと

〔**岷**〕前に「その子なりけり、とおぼし合せつ」と有。ここにてはいよいよ治定し給ふ也。

ちかくれて後、よをそむきて侍るが、このごろわづらふ事侍るによ亡

昔 向 尼ニナリタルコト也

煩

り、かく京にもまかでねば、たのもし所にこもりて物し侍るなり、△拙僧方

△シテ

来り住

と聞え給ふ。かの大納言の御むすめ、ものし給ふと聞給へしは、す源詞

△イカニ

きずきしきかたにはあらで、まめやかに聞ゆるなり、とおしあてに\* 僧部詞

真 実

△タツ丞

の給へば、むすめただひとり侍りし、うせてこの十よ年にやなり侍亡

亡

りぬらん。故大納言は、内に奉らんなど、かしこういつき侍りしを、禁中

ダイジニソツダテ

そのほいのごとくも物し侍らで、すぎ侍りにしかば、ただこの尼君本章

逝

ひとりもてあつかひ侍りしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部ウチ

△シテ

ウチ

△侍リケン

卿の宮なん、しのびてかたらひつき給へりけるを、もとの北のかた本

ヒソカニ△其ムスメニ 付

やんことなくなどして、やすからぬ事おほくて、あけくれ物を思ひ安

安

てなん、なくなり侍りにし。もの思ひにやまひづく物と、めにちか病 着 目 近

く見給へしなど申給ふ。さらばその子なりけり、とおぼしあはせ給\* 源心

△人ノ

ひつ。みこの御すぢにて、かの人にもかよひ聞えたるにや、といと兵部卿 藤ツボ 似 イヨイ

兵部卿

藤ツボ

似

イヨイ

どあはれにみまほしく、人のほどもあてにをかしう、なかなかのさイナシ

クラキ 貴

ナマナカカ

かしら心なく、うちかたらひて、心のままにをしへ、おふしたててシコフリ

シコフリ

生 立

見ばやとおもほす。いとあはれに物し給ふことかな。それはとどめ源詞

△此世ニ

給ふかたみもなきかと、をさなかりつるゆくすゑの、猶たしかにし\* 源

△人ノ

らまほしくて、とひ給へば、なくなり侍りしほどにこそ侍しか。そ\* 僧部詞

ジブン

△一人ウミ

れも女にてぞ。それにつけても、物思ひのもよほしになん、よはひイモナシ

△侍リシ

催

△尼君ノ 略

の末に思ひ給へなげき侍める、と聞え給ふ。さればよとおぼさる。\* 源

あやしきことなれど

〔岷〕僧都へは申にくき事なれども、などとあへしらひたる詞なるべし。

ゆきかかつらふかたも云々

〔釈〕癸上なるべし。「よに心のしまぬ」とは、俗に縁ヅクとかいふごとく、互に心のふかく染ぬ故にやあらんとの意なるべし。

つねの人におほしなぞらへて

〔玉〕我をよのつねの人の思ふ心のやうにおほして、まだ似つかはしからぬよはひなればはしたなくやおぼさん、我はよのつねの人のやうにいもせの交の事を思ひて申にはあらず、と也。

まだむげに

〔玉〕「まだ」は、いまだ也。「又」と見はひがこと也。

女は人にもてなされて云々

〔玉〕此語は「おぼ北の方にかたらひて」といふへかけて心得べし。まだいとぎなくは侍れども、女は云々なれば祖母にかたらひて見侍らん、といふ意也。

〔釈〕此所の意は、女は人にとりつくろはれて人の妻にもなる物なれば、世をすてたる法師などのあづかるべき事にもあらず、されば、委しくは得執し申さず、祖母北の方にかたらひて其心にまかせんとの意也。「とり申す」とは、事をとりて申す意にて、執達といはんがごとし。諸注たがへり。

えよくも聞え給はず

〔釈〕なほとやかやくと、よきさまにもえかたらひ給はぬ也。「え」もじ、「聞え」の上にある意也。

する事侍るころになん

〔玉補〕「頃」は、此日比の「頃」也。時刻をいふにあらず。注に「初夜のつとめ也」と有はたがへり。さては次の詞と重複せり。

心ちもなやましきに

〔釈〕癸後なれば也。

滝のよどみも

〔玉補〕「よどみ」ここに用なし。これは必「とよみ」を誤れるなるべし。〔釈〕右の説のごとく見ては難なし。「よどみ」は、滝の岩にせかれてこちかしたまり淀むなれば、いかが。「とよみ」は、響字を書来れる意にて、ひびきの事也。

ねふたげなると経の

〔細〕引声のあみだ経なるべし。

〔岷〕例時とて声を引てよむ也。

〔釈〕僧都の説経なるべし。山寺の春夜のけしき、例のいとめでたし。すすろなる人も

〔釈〕心なくすすろなる人も、此けしきに感じては物哀なるべし。まして源氏君は思しめぐらす事多くてまどろまれ給はず、と也。

初夜といひしかども

〔釈〕僧都、「初夜過して」といひしかども来らずして、夜のいたく更たるさま也。

すすのけうそくに

〔岷〕念珠の、脇息にあたるなり。

〔河〕枕草子云、「すすの、けうそくにあたりてなりたるこそ心にくけれ」。なつかしう打そよめく

〔釈〕女房たちなどなるべし。

とにたてわたしたる屏風の中を

〔釈〕尼君の居所は「西おもて」と上にあり。源氏君は南おもてにおほすれば、西おもての間の外にたてたる屏風なるべし。

扇をならし給へば

〔釈〕昔は人をよぶに扇を鳴したること、此物語の中にもあまた見えたり。今の人の、手をたたく類なるべし。

あやしきことなれど、をさなき御うしろみにおぼすべく、聞え給ひ  
イカガナ △大ノ

てんや。おもふ心ありて、ゆきかかつらふかたも侍りながら、よに カカハル 癸上也

心のしまぬにやあらん、ひとりずみにてのみなん。まだにげなきほ 独住 バカリ △居侍也 未 似気

どと、つねの人におほしなぞらへて、はしたなくやなどの給へば、 △我ヲ尋常 准 フツガフニヤ△オホサレン

いとうれしかるべきおほせごとなるを、まだむげにいはいはけなきほど 僧部詞 一向ニ 幼

に侍るめれば、たはふれにても、御らんじかたくや。そもそも女は 知

人にもてなされて、おとなにもなり給ふ物なれば、くはしくはえと トリナサレ 大人 委 得

り申さず。かのおぼ北のかたにかたらひ侍りて聞えさせん、とすく 祖母 談 合

よかにいひて、ものごはきさまし給へれば、わかき御心にはづかし ガタイ 源

くて、えよくも聞え給はず。あみだほとけものし給ふだうに、する 阿弥陀 仏

事侍るころになん。そやいまだつとめ侍らず。すぐしてさぶらはん 初夜 未 勤

とてのぼり給ひぬ。君はこちもいとなやましきに、雨すこしうち △アミダ堂 △

そそぎ、山風ひややかに吹たるに、滝のよどみもまさりて、おとた 冷 音

かう聞ゆ。すこしねふたげなると経の、たえだえすぐく聞ゆるなど、 高 凄 読

すすろなる人も、所がら物あはれなり。ましておもほしめぐらす事 ムサトシタ △源ノ

おほくて、まどろまれ給はず。そやといひしかども、夜もいたうふ 眠 著 △僧都ノ

けにけり。内にも人のねぬけはひしるくて、いとしのびたれど、ず 尾君ノ方 著 珠

ずのけうそくにひきならさるおとほの聞え、なつかしう打そよめ 数 脇 息 引 鳴 音 カスカニ

くおとなひ、あてはかなりと聞給ひて、ほどもなく近ければ、とに 上ヒシニコロニクニシ 間

たてわたしたる屏風の中を、すこしひきあけて、扇をならし給へば、 建 ツツケ 鳴

すこししぞきて云々

●この出たる人、くらき故に源氏の居給ふをどみにえ見つけず、少し退きて、「あやしや、扇のおとはひが耳の間ぞこなひか」とたどる也。玉小櫛に源氏の退き給ふやうにいはれたるはわろし。又此出たる人を、旧注に少納言ときはめていはれたるもいかが。げにも少納言めきては聞ゆれど、猶ただ誰ともなく一人の女房と見るべし。

ほとけの御しるべ

河 從冥入於冥、永不聞、法華經 仏名

●此文によりて、且僧家尼君おはせば、所につけての給ふ也。

●此出たる女房を仏のしるべにとりなして、仏は冥途に入ても更に迷ふまじく、其仏の御しるべなればたがふまじき物を、などひが耳とはたどるぞ、といふ意也。

玉 旧注に「尼君へ歌まるらせ給はんしるべに云々」は、ひがこと也。

はつくさの云々

●はつ草に紫上をたとへたるは、さらに論なし。さて、その初草の若紫を見るより、我たびねの袖も涙にかわかぬ、といふを、草の縁の露にとりなしたるなり。「うへ」といへるに身のうへの事をもかねたるか、さまであらぬか。

と聞え給ひてんや

岷 かやうにつたへてくれられんや、とのたまふ也。

承りわくべき人も

岷 「わくべき」といへる、おもしろし。紫上の幼きをかくいふ也。

おのづから云々

孟 さる故ありて申すと思はれよ、と也。

よついたる

●「よづく」とは、男女のなからひの事をしるをいふ。既にいへり。

さるにては

玉 それにしては、といふこと也。

なさけなしとて

●返歌の遅きは情のなき事としたる、その世のならばしなり。

まくらゆふ云々

●若草の御歌をすきまき方には取なきて、返しをし給ふ也。

●「まくらゆふ」とは草枕を結ふといふ意にて、旅寝の事也。さて、こよひばかりのたびねの露けさを、我常にすむ山の苔の衣の露けさにくらべては申給ふな、同じやうの事にはあらず、はるかに此方の露けさはまさり侍る、といふ意也。故に「ひがたう侍る物を」と言そへたり。旧注に「み山の苔とは袖の事也」とあるは、説さまよからず。「露けさ」は、いづれも袖の事をにほはせたるなれど、上の歌の「たびねの袖」とあるにゆづりてはぶきたるなり。花鳥に、「おく山のこけの衣にくらべなんいづれか露はこぼれまきると、といふ歌を挙げられたるは、類例なり。引歌にはあらず。

入つてなる御せつそいは

●人伝なる消息は、いまだいひもしらず聞もならず、といふ意也。

ひがこと聞給へるならん

●岷 江本「いかでひがこと」とあり。もどしか有しことしるければ、今補へつ。いかにして紫上の事を聞ひがめ給へるならん、との意也。「ひがこと」といふは、まだ幼き人の事をとかくの給ふは必聞ひがめ給へるならん、といふ意にて「ひがこと」とはいへる也。旧注たがへり。

おぼえなきこちすべかめれど、聞しらぬやうにやは、とてゐざり  
△内ノ女房ナド △扇ノ音 △アルベモ

いづる人あなり。すこししぞきて、あやし。ひがみにや、とたど  
少納言下ナルベシ 退 フシギヤ キキソコナヒ

るを聞給ひて、仏の御しるべは、くらきにいりてもさらにたがふま  
源詞 案内 冥入 更進

じかなる物を、とのたまふ御こゑの、いとわかうあてなるに、うち  
ン 若貴 女房 イヒ

いでむこわづかひもはづかしけれど、いかなるかたの御しるべにか  
出サン 声 イハ 詞 方 △ハ

は。おぼつかなく、と聞ゆ。げにうちつけなり、とおほめき給はん  
源詞 ナルホド ソツジ

も、ことわりなれど、  
モ ット モ

はつ草のわか葉のうへを見つるよりたびねの袖も露ぞかわかぬ。  
\*

と聞え給ひてんや、とのたまふ。さらにかうやうの御せうそこ、う  
\* 女房詞 イカヤウ 消息 イヒソギ

け給はりわくべき人も物し給はぬさまは、しろしめしたりげなるを、  
承 分 △源二モ

たれにかは、と聞ゆ。おのづからさるやうありて聞ゆるならん、と  
△申サン 自 然 ユエ マウス

思ひなし給へかし、との給へば、いりて聞ゆ。あないまめかし。こ  
女房 入 △尼君二 ニアタウセイフウナ

の君や。よづいたるほどにおはするとぞおぼすらむ。さるにてはか  
兄也 \* ソレニシテハ

のわか草を、いかできい給へることぞ、とさまさまあやしきに、心  
ドウシテ 聞 イロイロフシギナ

もみだれて、久しうなれば、なさけなしとて、  
△下カク考ルマニ

まくらゆふこよひばかりの露けさをみ山のこけにくらべざらな  
＊ 尼君

ん。ひがたう侍るものを、と聞え給ふ。かうやうの人づてなる御せ  
乾 難 源詞 イカヤウ \*

うそこは、まださらに聞えしらず、ならはぬことになん。かたじけ  
習 オソレ オ

なくとも、かかるついでに、まめまめしう聞えさすべき事なん、と  
ホク 実 々 △侍ル

聞えたまへれば、尼君いかでひがことときき給へるならん、といとは  
下ウシテ



聞えそめ侍りぬれば

【新】いはで思ひしよりも、かくうちいでては終にいひ侍らんものどたのもしき、と也。  
おしたて給ひつ

【釈】上に「とにたてわたしたる屏風の中をすこし引あけて」とある首尾なれば、屏風をおしたて給へる也。湖月師説に「障子などをたて給ふ也」といへるはいかに。

法華三昧おこなふ堂の

【河】三昧、梵語也。此云正受<sup>ニホ</sup>。又名正定<sup>ツツ</sup>。法華懺法<sup>ハハ</sup>、智者大師<sup>イシ</sup>普賢所<sup>ソ</sup>行法門也。

【花】正観に四種三昧あり。いはゆる常行・常坐・半行半坐・非行非坐の四種也。法華懺法は、半行半坐の三昧也。懺法は、天台大師、或説遵式つくり給ひて、六時に六根の罪を懺悔する法門也。

吹まよふ云々

【玉】上句、せんぼうの声を聞いて、煩惱の夢のさめぬることちす、といふ意をふくめて、感涙をもよほす意をかねたるか。

さしくみに云々

【新】さしくみに「は、さしつけにといふ意也。さて君此滝の音などを聞いて、さしつけに袖ぬらし給ふと承れど、なれてすむ身はさもおぼえぬは、みみなれたる故にや侍らん、とこたへたり云々。

【釈】「さしくみ」の説、新釈のごとし。なほ別にも論すべし。さて「さしくみ」といへるは、もとより水の縁語なる故に取出たる也。結句の詞つよきを思ふに、仏心の動かぬをそへたるにも有べし。新釈右に引たる下にはれたる説はひがこと也。僧都のうたなることは勿論なり。

あけゆく空は云々

【釈】春山のけしき、いとめでたし。旧注にさまざまの詩など引られたれど、すべて用なし。作者の心にかの詩などを思はれぬにもあらざめれど、それとたしかにあてたるならねば、いたづらごと也。

まぎればてぬ

【釈】これは源氏君の事なれば、「まぎればて給ひぬ」とあるべきを、写しおとせるにや。

うごきもえせねど

【湖師】さきに「老かがまりて、室の外にもまかです」といひし首尾也。

ごしん

河 護身。

湖師 加持する事也。

すきひがめる

【玉】「ひがめる」は、よのつねのさかりの人の声とはかはれるよし也。調子にのきたりといふは、あまりにことごとし。

新 齒多く落ぬれば、声のすきてひがめる也。

ぐつづきて

細 「ぐつ」は功也。功のいりたる也。

世に見えぬさまの

【玉補】すべて書中に「くだ物」とあるは皆、今世の硯蓋の取看といふ類の物と見えたり。これらの詞を見てもしるべし。

谷のそこまで

【評】此句にて、僧都のいという奔走したるさまをあらはしたる、めでたし。

ことしばかりの

【細】前にも「此二とせ」と有。三年住山の人と思えたり。

中々にも

【玉】此度かく対面し奉れるはうれしき物から、別れ奉りては中々に名残かなしかるべし、と也。旧注いみじきひがこと也。

いまこの花の

【釈】この今は、俗言にオツツケといふに同じつかひぎま也。

ことを、さもしらでの給ふとおぼして、心とけたる御いらへもなし。  
サウトモ

僧都おはしぬれば、よしかう聞えそめ侍りぬれば、いとたのもしう  
源詞 ママヨ

なん、とておしたて給ひつ。あかつきがたになりにければ、法華三  
△屏風ヲ

昧おこなふだうのせんぼうのこゑ、山おろしにつきて聞えくる、い  
堂 懺法 法 下風 △方

とたふとく、滝の音にひびきあひたり。

吹まよふみ山おろしに夢さめてなみだもよほすたきのおとかな。  
\*源

さしくみに袖ぬらしける山水にすめるところはさわぎやはする。  
\*+僧都

みみなれ侍りにけりやと聞え給ふ。明ゆく空はいといたうかすみて、  
耳 馴

山の鳥どもそこはかとなくさへづりあひたり。名もしらぬ本草の花  
イモ トコラトモナク 囁

ども、いろいろにちりまじり、にしきをしけると見ゆるに、鹿のた  
リカ イカ 錦 敷

たずみありくもめづらしく見給ふ。なやましさもまぎればてぬ。ひ  
イ イニ 驚

じりうごきもえせねど、とかうしてごしんまぬらせ給ふ。かれたる  
聖 動

こゑのいといたうすきひがめるも、あはれにぐつづきて、だらによ  
\*功 陀羅尼

みたり。御むかへの人々まありて、おこたり給へるよろこび聞え、  
△蘇ヲ

内よりも御つかひあり。僧都世に見えぬさまの御くだ物、なにくれ  
禁中 粟

と、谷の底までほりいでていとなみ聞え給ふ。ことしばかりのちか  
\*僧都詞 今年 誓

ひふかう侍りて、御おくりにもえまゐり侍るまじき事、なかなか  
\*御 酒

も思ひ給へらるべきかな、と聞え給ひて、おほみきまゐり給ふ。山  
源詞

水に心とまり侍りぬれど、内よりおぼつかながらせ給へるも、かし  
オソレ

こければなん。いまこの花のをりすぐさずまゐりこん。  
△マカリカヘル 遍

おほ

若紫

三二

みや人に云々

〔釈〕この山桜のさまを、歸りて大宮人につげて、風にちらぬさきにはやくきて見るべしとかたりて、もろともにこん、といふ意也。「風よりさきに」といへる、おもしろし。

うどんぐゑの

〔河案〕優曇華、金輪王出世瑞也。故号「靈瑞花」。人寿八万歳時節、金輪王遶四州。其時海水半減するによりて、此花出現する也。是を光源氏を待えたるによそへたる也。詞に「時ありて一たび開くなる」とあるも、法華の久遠時一現の心也。

〔新下〕に源の御有さまを「何事にももうつるまじかりける」といへるに同じ。

〔釈〕華を「ぐゑ」と書たるは、重き声によませんためにて、源氏を「ぐゑんじ」、法華経を「ほくゑん経」といへる類也。「み山ざくら」は即ここに咲たる花をいへるのみ也。

時ありて一たび

〔玉〕金光明経讚仏品に「希有希有、仏出於世、如優曇華時一現耳」。この文にていへる也。

おく山の云々

〔釈〕おく山にさしこめたる松の扉を希にあげて、まだ見ぬ花の顔を見る、といひて、まだ見ぬ花にうどんげをふくめて源氏君によそへたる也。「花のかほ」といふ例、余滴に挙たり。

〔岷〕私云、「むろのにもまかです」とあれば、「松の扉をまれにあげて」と云似合たり。「かほを見る哉」といふは、花のうつくしき心也。かほ鳥かほ花なども・うつくしき事也云々。

うちなきて

〔湖〕感涙なるべし。

とこ奉る見給ひて

〔玉〕奉る、とよみ切て見べし。「見給ひて」は、ただ僧都のそれを見たるよしのみなり。弄花・細流の説あたらす、無用也。

〔岷〕独鉗は菩提心の表也。

〔湖師〕独鉗は行人の常住もつ物也。まもりなどの為に人にも奉る也。

さうとく太子の云々

〔花〕百済国より金剛子のわたりたることは、元興寺資財帳第九云、「喜多

〔源〕宮人にゆきてかたらん山桜風よりさきにきても見るべく。とのた

まふ御もてなしこわづかひさへ、めもあやなるに、  
フルマヒ声マデミルモカガハユイヤウナ

〔僧都優曇華〕うどんぐゑの花まちえたるこちしてみ山ざくらにめこそうつら

ね。と聞え給へば、ほほゑみて、時ありてひとたびひらくなるは、

かたかなる物を、とのたまふ。ひじり御かはらけたまはりて、

おく山の松のとぼそをまれにあげてまだ見ぬ花のかほをみるか

な。とうちなきて見奉る。ひじり御まもりにどこたてまつる、見給

ひて、僧都さうとくたいしのくたらより得給へりける、こんがうじ

のずずの、玉のさうぞくしたる、やがてそのくにより入れたるはこ

のからめいたるを、すきたるふくろにいれて、五葉の枝につけて、

〔紺〕ころりのつぼどもに、御くすりどもいれて、藤さくらなどにつけ

て、所につけたる御おくり物ども、ささげ奉り給ふ。君はひじりよ

りはじめ、ど経しつる法師のふせ、まうけの物ども、さまざまにと

りにつかはしたりければそのわたりの山がつまで、さるべきものど

もたまひ、御ず経などしていで給ふうちに、僧都いり給ひて、かの

聞え給ひし事まねび聞え給へど、ともかうもただ今は聞えんかたな

し。もし御心ざしあらば、いま四五年をすぐしてこそは、ともかう

も、との給へば、さなん、とおなじさまにのみあるを、本いなしと

おぼす。御せうそこ、僧都のもととなるちひさきわらはして、

みや人に云々

〔釈〕この山桜のさまを、歸りて大宮人につげて、風にちらぬさきにはやくきて見るべしとかたりて、もろともにこん、といふ意也。「風よりさきに」といへる、おもしろし。

うどんぐゑの

〔河案〕優曇華、金輪王出世瑞也。故号「靈瑞花」。人寿八万歳時節、金輪王遶四州。其時海水半減するによりて、此花出現する也。是を光源氏を待えたるによそへたる也。詞に「時ありて一たび開くなる」とあるも、法華の久遠時一現の心也。

〔新下〕に源の御有さまを「何事にももうつるまじかりける」といへるに同じ。

〔釈〕華を「ぐゑ」と書たるは、重き声によませんためにて、源氏を「ぐゑんじ」、法華経を「ほくゑん経」といへる類也。「み山ざくら」は即ここに咲たる花をいへるのみ也。

時ありて一たび

〔玉〕金光明経讚仏品に「希有希有、仏出於世、如優曇華時一現耳」。この文にていへる也。

おく山の云々

〔釈〕おく山にさしこめたる松の扉を希にあげて、まだ見ぬ花の顔を見る、といひて、まだ見ぬ花にうどんげをふくめて源氏君によそへたる也。「花のかほ」といふ例、余滴に挙たり。

〔岷〕私云、「むろのにもまかです」とあれば、「松の扉をまれにあげて」と云似合たり。「かほを見る哉」といふは、花のうつくしき心也。かほ鳥かほ花なども・うつくしき事也云々。

うちなきて

〔湖〕感涙なるべし。

とこ奉る見給ひて

〔玉〕奉る、とよみ切て見べし。「見給ひて」は、ただ僧都のそれを見たるよしのみなり。弄花・細流の説あたらす、無用也。

〔岷〕独鉗は菩提心の表也。

〔湖師〕独鉗は行人の常住もつ物也。まもりなどの為に人にも奉る也。

さうとく太子の云々

〔花〕百済国より金剛子のわたりたることは、元興寺資財帳第九云、「喜多

夕まぐれ云々

〔細〕尼君の方への歌なり。ちと見給ひし事をほのめかし給ふ也。  
〔下〕句、此所をたちうく思ふ事を、霞のたつにいひかけたる也。紫上を花にたとへたるはもちろん也。

まことこや云々

〔新〕おもては花のうへにて、下にはかすめほのめかし給ふ事の、まことかかりそめごとか、年へて後に見参らせん、といへり。故に御心ざしあらば、今四五年を過して、と有し意也。

〔初〕句は「立うき」へ係る意也。「かすむる」と有にいひかすめ給ふことをよせたること、花鳥の御説のごとし。拾遺に下句を「けさの御たちのけしきに見奉らんと也」といへるはわるし。

御むかへの人々

〔評〕此段は余波に書なして、なほ上の段のあへなく失なん事を惜みたる法也。心をつくべし。

\*源 夕まぐれほのかに花の色をみてけさはかすみのたちぞわづらふ。

御かへし、

\*尼君 まことにや花のあたりはたちうきとかすむる空のけしきをも見

ん。とよしあるてのいとあてなるを、うちすてかい給へり。御車に

奉るほど、おほひ殿より、いづちともなくておはしましにけること

とて、御むかへの人々、君たちなどあまたまゐり給へり。頭中将左

中弁、さらぬ君だちもしたひ聞えて、かうやうの御ともはつかうま

つり侍らんと思ひ給ふるを、あさましうおくらさせ給へること、と

うらみ聞えて、いとみじき花のかげに、しばしもやすらはずたち

かへり侍らんは、あかぬわざかなとの給ふ。岩がくれのこけのうへ

になみゐて、かはらけまゐる。おちくる水のさまなど、ゆゑある滝

のもとなり。頭中将ふところなりけるふえとり出て、吹すました

り。弁の君扇はかなう打ならして、とよらの寺のにしなるやとうた

ふ。人よりはことなる君だちなるを、源氏の君いといたううちなや

みて、岩によりぬ給へるは、たぐひなくゆゆしき御有さまにぞ、何

事にもめうつるまじかりける。れいのひちりきふくずぬじん、さう

のふえもたせたるすきものなどあり。僧都きんをみづからもてまゐ

りて、これただ御てひとつあそばして、おなじくは山の鳥もおどろ

かし侍らん、とせちに聞え給へば、みだりごこちいとたへがたき物

をと聞え給へど、けにくからずかきならして、みなたち給ひぬ。あ

とよらの寺の西なるや

〔河〕可津良支乃、天良乃末江名留也。止与良乃天良能、爾之奈留也。江乃波并爾、之良太万之川久也。末之良太末志津久也。於之止々、於之止々。下略 催馬楽宮城

〔歌〕この歌は光仁天皇の御時の童謡なるを、催馬楽にいれたる也。豊浦寺は大和に有し也。此寺の事、諸説さだかならねど、ここに用なければ略きつ。「えのはる」は、榎葉井也。名所也。

人よりはことなる

〔岷〕御むかへに参たる人々も皆類なき殿上人なれども、源の御前にてはけおさる也。

いたう打なやみ

〔歌〕うつくしき人の打なやみて、ますます艶に見ゆるさまをいへり。例のほめたる脈也。

れいのひちりきふく隨身

〔湖〕いつも御供にひちりきもちて参る人なるべし。

さうの笛もたせたる

〔細〕是も隨身なるべし。

同じくは山の鳥も

〔河〕弧巴鼓、琴瑟、鳥舞而鳴、魚躍而遊矣。列子  
〔湖〕此山の人僧俗皆源に目驚せし心をいふ詞也。

むつかしき日の本の

花上の僧都の歌に、光源氏をば優曇華にたとへて輪王の出世によせたり。故に此詞はある也。  
玉かく皇国をいやしくいひなすは、ほうし心のならひにてつねの事ながら、いともかしこきまがことなり。

かの人の御子に

御上に「かのすぎ給ひにけん御かはりに、おほしないてんや」とありし脈也。心をつくべし。  
ひいなあそびにも云々

評 此段、紫上の源氏君にはじめて思ひつき給ふことを説出て、後の伏案どしたり。さてひいなの子も絵の事も、皆後々に引いで用あることにあやなしたり。心をつけて置べき也。すべて僧都の送出られたる所よりは、余波のほひにそへたる文なる中に、おのづから末の巻の伏線をかされたり。よく考へて味はふべし。

君はまつ内に

御先の字めでたし。

ゆゆしとおほしめしたり

孟帝の御心に、源の顔色を御覧じておどろき給ふ也。「ゆゆし」といふ詞は、所によりてかはる。いまいましき事にもいふなり。

あざり

細 七高山阿闍梨、近江国比叡山・比良山、美濃国伊吹山、山城国愛宕山、摂津国神峰寺、大和国金峯山・葛城山。毎年給料五十斛。春秋各四十九日、於二件山修業師悔過、祈天下五穀也。承和三年定

いかがと思ひはばかりて

湖源の忍びの御ありきに大臣のおはさん事はわざと遠慮し給ひて、と也。

のどやかに

細 大殿、我御方に誘引し給ふ也。

さしもおほさねど

御 上下の葵上の例の脈也。

みづからはひきいらりて

岷源をば端にのせ奉りて、大殿は奥のかたにのり給ふ也。車はおくのかたはさがり也。

かづくちをしと、いふかひなき法師わらはべも、涙をおとしあへり。  
ザンネン

ましてうちには、年おいたる尼君たちなど、またさらにかかる人の  
内 イまたナシ 末

御有さまを見ざりつれば、この世のものもおぼえ給はずと聞えあ  
イ給

へり。僧都も、あはれなにの契にて、かかる御さまながら、いとむ  
ム アアモウ 宿縁 △イシキ

つかしき日のもとの末の世に、生れ給ひつらんとみるに、いとなん  
イ給へらん サクロシイ △イシキ

かなしき、とてめおしのごひ給ふ。(このわか君をさなごこちに、  
目 押 拭 カノ 幼

めでたき人かなと見給ひて、宮の御ありさまよりも、まさり給へる  
ウツクシキ △源乙 父ミヤ

かな、などの給ふ。さらばかの人の御子になりておはしませよと聞  
女房たち詞\*

ゆれば、うちうなづきて、いとようありなん、とおもほしたり。ひ  
紫上

いなあそびにも、糸かい給ふにも、源氏の君とつくりいでて、きよ  
難 遊 絵 画 イを 浄

らなるきぬきせかしづき給ふ『君はまづうちに参り給ひて、日ごろ  
衣 着 先 禁 中 コノゴロ

の御物語など聞え給ふ。いといたうおどろへにけり、とてゆゆしと  
帝 衰 忌 々

おぼしめしたり。ひじりのたふとかりける事などはせ給ふ。くは  
聖 源

しくそうし給へば、あざりなどにもなるべきものにこそあめれ。お  
奏

こなひのらうはつもりて、おほやけにしろしめされざりける事、と  
朝 延 △三

たふとがりの給はせけり◎大殿まありあひ給ひて、御むかへにもと  
イ 合 詞 迎 △参

思ひ給へつれど、しのびたる御ありきにはいかが、と思ひはばかり  
イの 禰

てなん。のどやかに一二日うちやすみ給へとて、やがて御おくりつ  
ユルヤカ ゴキウソクシ スゲニ 送

かうまつらんと申給へば、さしもおほさねど、ひかされてまかで給  
サウモ 退 出

ふ。わが御車にのせ奉り給ひて、みづからはひきいらりて奉れり。も  
大臣 自身 引 入

さすがに心ぐるしく  
湖師葵は源の心にいらねども、大殿の懇なるはさすがに心ぐるしくいとほしく思ひ給ふ、と也。

ものひめ君

〔釈〕画にかきたる物語ぶみなどの中なる姫君といふ意か、又は作り物の人形といふ意か。さては「系にかきたる」といふに少しかなはぬか。とにかくに、かきたるものの、とつづけてよむはわるし。  
思ふことも打かすめ云々

〔玉〕「年のかさなるにそへて」といふより源氏君の詞也。さて「まさるを」のをもし、おだやかならず。「思はずに」といへるも、言たらず。はぶきていひのこすも詞にこそよれ、かくては語とのはず。さればこは、〔御心のへだてもまさるは、いと心ぐるしく思はずにこそ、と有けんを、はををに誤り、こそを落せるなるべし。さて「ときどきは」といふより源氏詞としたる注は、ひがこと也。さては、上に「おもほして」といへるにかなはず。「おもほして」の下より詞なることしるし。

〔玉補〕「思ふことも打かすめ云々」より、すべて皆源の御詞なり。小櫛のあやまられたり。

〔小櫛〕説のしくならば、「あはれならめ」といふ下にどもじあるべき也。されど「おもほして」といふこと、葵上のおもほす事を源氏のたまへるならでは聞えがたし。さらば補遺説のしく、「思ふことも打かすめ」といふより源氏君の詞とすべきにや。さては又「いふかひありて云々あはれならめ」といふ語勢あまりなるやうなれど、すべては心つつくへし。かくても「思はずに」といふことは猶おだやかならず。脱文などあるにや。なほ考ふべし。諸抄に何のさだまなきはいと鹿し。

よのつねなる御けしきを

〔釈〕よのつねの女のやうに、したしくかたらひ給ふけしきを見まほし、と也。

たへがたう

〔釈〕癡病の事。

とはぬつらき

〔拾〕六帖五「こともつき程はなれどかた時もとはぬはつらき物にぞ有ける 同六「我宿にきめる鶯羽をよわみとはぬはつらきものにぞ有ける 河後「わすれねといひしにかなふ君なれどとはぬはつらき物にぞありける

〔釈〕拾遺に引る初の歌の詞なるべし。

まれまれは

〔弄〕細「まれまれ」とは、たまたまの給ひでる詞のかやうなるよ、とすらみ給ふ也云々。

〔釈〕案に、此詞穩ならず。もしくは上の「とはぬはつらき」といふ引歌の句などにや。さらば引歌なほあらんか。考ふべし。このままにていはば、「とはぬはつらき」など、まれまれにかよひくる人のやうにの給ふは、あさましの御事かな、といふ意にや。旧注のごとくにては、はもじ聞えがたし。

とはぬなどいふきは

〔釈〕「とはぬ」などいふことは、をりをりかよふ所などにこそいふべきことなれ、本台などの分際※にの給ふべきことには侍らず、との意なるべし。こころみ聞ゆるほど

〔釈〕これは源氏君のこころかしこのびありき給ふことなどを、葵上を試んためにするやうにのたまひなすなるべし。

よしやいのちだに

〔余〕拾遺集恋一よみ人しらず、いかにしてしばしわすれんいのちだにあらばあふよのありもこそすれ 古今集離別よみ人しらず、えぞしらぬ今こころみよ命あらばわれやわする人やとはぬと

〔釈〕右の古今の歌、孟津・新釈にも挙げられたり。ここになかなふべし。旧注の引歌はひがことなること、余滴にいへるがごとし。さてこの意は、よしや命だにあらば、我やわする人やとはぬといふことを、つひには思ひ弁まへ給ふを見ん、といふ意也。

ふと

〔釈〕「ふと」は形容の辞。

てかしづき聞え給へる御心ばへのあはれなるをぞ、  
\* さすがに心ぐる

しくおもほしける。殿にも、おはしますらんと心づかひし給ひて、  
クニ 葵上ノ方 〔源ノ〕 用意

ひさしく見給はぬほどに、  
久 アヒタ ヒトシホ 台 磨 修 万

ろづをととのへ給へり。女君れいのはひかくれて、  
事 葵上 イツモノ サツソク

はぬを、おとどせちに聞え給ひて、  
大臣 ヤウヤウノコトデ 〔源ノ〕 処

系にかきたる、  
絵 葵上ノ方 為 居 ミウコキシ

給ふこともかたく、  
キ ャウシテ ャウリ

め、山みちの物語をも聞えむに、いふかひありて、  
をかしう打いら

へ給はばこそあはれならめ、世には心もとけず、  
うとくはづかしき

ものにおもほして、  
累 年のかさなるにそへて、御心のへだてもまさる

を、いとくるしく思はずに、  
メイワケニ アングワイ ャリフシ 尋 常

ばや。たへがたうわづらひ侍りしをも、  
堪 煩 いかがとだにとはせ給はぬ

こそ、めづらしからぬ事なれど、  
ヤハリ 猶うらめしう、と聞え給ふ。から

うじて、  
ウノコトデ ツレナイ 後 目

へるまみ、  
メツキ 気 貴 美 けたかうつくしげなる御かたちな

り。まれまれはあさましの御ことや。  
\* 源詞 とはぬなどいふきは、こと

にこそ侍るなれ。心うくものたまひなすかな。  
ツラク 成 常住 不斷 フツガフナ

き御もてなしを、  
ガ 若 直 今 左 右

にこころみ聞ゆるほど、  
イ 試 ウチニ イヨイヨ 疎

いのちだにとて、  
テモ 夜 葵上 チヤットモ

かのわか草の

〔**釈**〕かくいひて紫上ときかしむるは例の文法。

いひよりがたき

〔**釈**〕似気なきことと思へるがことわりなれば、しひてはいひよりがたき也。

兵部卿の宮は云々

〔**釈**〕あてになまめくは、上品にてしなやかなる也。〕にほひやかなるは、花やかにして愛らしき也。旧注はまぎらはしき説也。

いかでかのひとぞうに

〔**玉補**〕本のままにてよし。小櫛に「給へらん」とある本をよしとせられたるはいかが。

〔**釈**〕「かの一族」とは、藤壺の一族といふをにほはせてかける也。「ひとつきさいばら」とは、兵部卿の御兄弟おほかる中に、藤壺と兵部卿とは同じ後の腹に生れ給ふはらかなれば、さて紫上の藤壺に似給ふならん、との意也。

ゆかりいとむつまじきに

〔**万**〕紫上は藤壺の御姪女にておはしませば、そのゆかりむつまじき、と也。藤の縁にゆかり面白き詞也。

いかでかと

〔**釈**〕いかでかむかへどらんの意也。かもじ余りたるこちす。もてはなれたりし

〔**釈**〕尼君、紫上の事をにげなき事としてもてはなれたりし也。

思ひ給ふるさまをも

〔**玉**〕旧注に「云々をなん、残多く思召故、又かく文を参らすとの心也」といへるはたがへり。「云々をなん」の下に、「のこりおほく思ひ侍る」といふ意をふくめたるまでにて、それ故「又文を参らす」といふ意はなし。「かばかり聞ゆるにても」といふはその意にはあらず、下へかかれる詞なるをや。

おもかけは

〔**釈**〕上句、山ざくらの面影の我身をはなれぬ意にて、すなはち紫上のおもかけの事也。

〔**拾**〕我心のあるほどをば山桜のもとにとめてこし物を、何の心の身に残りておもかけの立そふぞ、と也。

おしつづみ給へり

〔**花**〕河海につつま文をたてぶみの事にいへる、おほつかなし。つつま文は宇治巻にも見えたり。たて文にては有まじきにや。嫁娶記に見えたり云々。

さだすぎたる

〔**釈**〕定過るとは、よきころほひを過て年のふけたるをいふ。諸説語尺にいへり。

めもあやに

〔**釈**〕目も文にの意にて、見るに文色ありてめでたきをほめていふ詞なり。

ゆくての

〔**釈**〕過しころは道のついでに立より給ひての事なる故に、「ゆくての御事」といへる、をかし。旧注はひがことおほし。

聞えわづらひ給ひて、うちなげきてふし給へるも、なま心づきな源きニクハヌ

にやあらん、ねふたげにもてなして、とかう世をおもほしみだるるトヤカクヤ

事おほかり。かのわか草のおひいでんほどの、猶ゆかしきを、にげ生 出 ウチ ヤハリ 似気

ないほどと思へりしも、ことわりぞかし。いひよりがたきことにも△尼君ナドノ モットモ

有かな。いかにかまへて、ただ心やすくむかへとりて、あけくれのドウコシラヘテ 迎 取

なぐさめにもみん。兵部卿の宮は、いとあてになまめい給へれど、上ビシ ナヤカ

にほひやかになどもあらぬを、いかでかのひとぞうにおぼえ給ひつトウシテ 一 似

らむ。ひとつきさいばらなればにや、などおもほす。ゆかりいとむ△アラン 所 緑

つましきに、いかでか、とふかうおもほす。またの日御ふみ奉れ給イリ 翌

へり。僧都にもほのめかし給ふべし。あまうへには、もてはなれた\*文の詞

りし御けしきの、つつましさに、思ひ給ふるさまをも、えあらはしハツカシサ 顯

はて侍らずなりにしをなん。かばかり聞ゆるにても、おしなべたら△ノコロオホク オモヒ玉フル ヒトトホリナラ

ぬ心ざしのほどを、御覧じしらば、いかにうれしうなどあり。中にイカホドカ △思ヒ侍リ

ちひさくひきむすびて、結

おもかけは身をもはなれず山ざくらの心のかぎりとめてこしかど。\*源 トメオキテカヘリシ

よのまの風もうしろめたうなん、とあり。御手などはさるものにイなど キニカカリテ

てただはかなうおしつづみ給へるさまも、さだすぎたる御めどもにイただナシ ナニトナウ 包 △文ノ トシフケ △尼君ノ

は、めもあやにこのましようみゆ。あなかたはらいたや。いかがきこ\* 好 アアオキノドクヤ

えむ、とおほしわづらふ。ゆくての御ことは、なほざりにも思ひ給\*文の詞 ユキガカリノ 等 聞

へなされしを、ふりはへさせ給へるに、聞えさせんかたなくなん。成 ワザワサトハセ マウシアゲン

まだなにはづをだに

〔河〕此詞を、常の人、歌をいまだよまずと心得たるもあるにや。さにはあらず。古今序に、難波津・浅香山の歌を「手ならふ人のはじめにもしける」といへる事也。いろはのぢやうに一宇づつかきて、いまだ此歌をだにかきえずといふ也。さて返事に、そのはなちがきなん見まほしきといへる也。

さても

〔孟〕「さても」と歌へかけて見るべし。

〔釈〕此御説のごとし。「さても」は「はかなき」へかかる語脈也。あらしふく

〔湖〕師源の文に「夜のまの風もうしろめたく」とあるをうけて、「あらしふく」とよめり。上には、花のさかりのすこしのほどに心をとむるはかなき、といひて、下は、源の紫のをさなきに心をかけ給ふは、嵐ふく山の桜のちらぬまに心をとむるごどくはかなからん、となり。

〔釈〕此説解得たり。弄花・玉小櫛などに、ただ花のうへをのみよめるやうに注せられたるは、わるし。さては、次なる「うしろめたう」といふ詞も用なきをや。

いとどうしろめたう

〔玉〕さやうのはかなき御心にては、紫上をまかせ奉ん事はいよいよしるめたし、と也。「いとど」とは、源氏君の文に「夜のまの風もうしろめたくなん」と有をうけていへり。

少納言のめのとといふ人あべし

〔評〕上のかいまみの所に、「少納言のめのとぞ人いふめるは」と有て、さて扇をならし給へる時出来たる人には名をいはず、ここにて「少納言をたづねてかたらへ」とあるにて、かの夜の人も少納言なるべしとやうにほはせたる筆のたくみ、いひしらずあぢはひあり。

さもかからぬくまなき

〔釈〕いづくのくまぐままでも源氏君のすき心のかかるをいへるなり。「くま」は隈にて、かくれたる所をいふ。

いはけなげなりしけはひを

〔玉補〕此下にもどもじ落たるべし。

くはしくおもほしのたまふさま

〔玉補〕「くはしく」は「おもほし」へはつづかず、下の「かたる」へかかる也。

御はなちがき

〔河〕放書也。さきにいふごどく、つづけてかかずして一字づつかきたるなり。

れいの中なるには

〔湖〕前にも「中にちひさく引結びて」と有、紫への文也。

あさか山云々

〔河〕あさか山かげさへみゆる山の井の浅くは人を思ふものかは古今序拾万葉十六には下句「あさき心を吾おもはなくに」。

〔花〕さきの「なにはづをだに」といへるによりて、あさか山をとり出し侍り。古今序の詞を思ひよせたる也。

〔釈〕「山の井の影」といひかけたること、諸抄のごとし。契沖の、けもじを濁りてよむといへるはひがごと也。清てよむべし。「かけはなる」は、もてはなるといふにひとし。

くみそめて云々

〔河〕くやくやくくみそめてけるあさければ袖のみぬるる山の井の水六巻一

〔釈〕初二句は引歌の詞を思ひて「ききし」とはいへるなり。下句は小櫛のごとし。「かげ」は紫上のかげ也。見るべきとある本は誤れる也。

〔玉〕下句、本歌に「浅ければ袖のみぬる」と有を、その浅きをしりながら影を見せ奉るべきことかは、と也。「我身を卑下したる也」といふ注はかなはず。

これみつも

〔花〕惟光かへりまゐりて、尼うへはいまだ同じ返事を申させ給ふよしを申すなり。

京の殿に

〔釈〕尼君の夫あぜちの大納言の家、京にあること下に見えたり。

まだなにはづをだに、はかばかしうつづけ侍らざめれば、かひなく難波津サヘシツカリト

なん。さても、

あらしふくをのへの桜ちらぬまをこころとめけるほどのはかな尼君

さ。いとどうしろめたうとあり。僧都の御かへりもおなじさまなれヒトシホ

ば、くちをしくて、二三日ありて、惟光をぞたてまつれ給ふ。少納源詞

言のめのとといふ人あべし。たづねてくはしうかたらへ、などの給△フレイ

ひしらす。さもかからぬくまなき御こころかな。さばかりいはけな知  
\*惟光心  
トコロ

げなりしけはひを、まほならねども見しほどを、おもひやるもをかケシキ  
タシカ

し。わざとかう御文あるを、僧都もかしこまり聞え給ふ。少納言に惟光  
如此  
アリガタガリ

せうそこしてあひたり。くはしうおもほしのたまふさま、おほかた△源ノ  
アンナイ

ひつづくれど、いとわりなき御ほどを、いかにおもほすにか、とゆ△アランノケ  
ワケナキ  
ムリナル

ゆしうなん、たれもたれもおほしける。御ふみにも、いとねんごろ△源ノ  
シカラズ  
尼君僧都下也

にかい給ひて、かの御はなちがきなん、なほ見給へまほしきとて、文詞  
放書  
ヤハリ

れいの中なるには、

あさか山あさくも人を思はぬになど山の井のかけはなるらん。御影懸  
離

かへし。

くみそめてくやしと聞し山のあの浅きながらやかげを見すべき。イユ  
\*尼君

惟光もおなじことを聞ゆ。このわづらひ給ふ事よろしくは、この頃ニ

すくして、京のどのにわたり給ひてなん聞えさすべき、とあるを、殿  
カヘリ

藤つぼの宮云々

**花** 三月四月の事なるべし。  
**弄** 三条の宮へまかで給ふ也。

つくづくとながめくらし  
**釈** 「つくづく」とは物を思ふ形容の辞、「ながめ」は物思ひのある時うかうかとしてものの見つめらるるをいふ。「くらし」は日をくらしして也。

王命婦

**孟** 藤壺の宮女なり。

**釈** 王の女などの宮づかへして命婦となりたるをかくいふべし。旧注に「王氏の命婦」と注せられたるはいかが。皇国に王氏といふ氏はあることなし。河海の例は引そこね給へる也。さてこの王命婦はこの御中のなかだちせし人もといふ事をことわらずして、ふとあらはしたる筆づかひ、例のいとめでたし。

せめありき給ふ

**釈** 日くるればなかだちの王命婦に、さるべきひまもどめよ、とせめ給ふ也。「せめ」は、今俗サイソクといふに同じ意也。さて「ありき」といへるに、つきまとひてせめ給ふさましられていとめでたし。

いかがたばかりけん

**拾** 日本紀に、慮・計・測・方便、これら皆「たばかり」とよみて、「はかる」に同じ。

見奉るほどさへ云々

**評** この二二句いとめでたし。現とはおぼえず夢のやうなるぞわびしき、といひて源氏君の心を評したる也。さてこの物のまぎれの事、これより上にはひたすらに思ひかけ給ふけしきをほのめかしおきて、ここに初めて逢給へる事をいへるが、既に実事ありし後のこととして藤壺の悔給へるさまにかきなされたる、いともいとも上手の筆つきといふべし。これより末々皆此意を脈としたり。深くあぢはふべし。

宮もあさましかりしを云々

**花** 是よりさき、源氏君の女御にまゐりちかづき給へること、此詞に見えたり。

**評** 花鳥の御説のごとし。しもじひとつにてすでに逢給へりしを聞せたる、例のめでたし。これより次々は藤壺の御心をいへるが、後々の巻までおし貫きて、いともいともせちにあはれに聞えたり。心をつくべし。

なのめなる事だに

**釈** わるき事だにあらば、せめては思ひ絶る種にもならんを、と也。いとせちなる書さま也。

つらうさへぞ

**玉** よろづすぐれたるが、つらうさへおぼさるる也。

くらぶの山に

**細** 只くらき心にて夜をしたふ心なるべし。古今集、秋夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

**玉** 會根好忠集に、いぎせことをぐらの山に家居してみじかき夏の夜をもうらみじ。此歌この意とおなじ。

あやにくなるみじか夜にて

**玉** 「あやにく」は、俗言にいちわるくといふ意也。

**万** 卯月の比なれば、おのづから短夜のなごり、さもや有けん。中々なり

**釈** 逢見ぬよりはなかなかつらし、との意也。

みてもまた云々

**玉** 「あふ」は、夢の縁の語也。夢には、あはずといひ、あふといふこと有也。「見ても」といふも、夢につきていへる言也。

**玉補** 「又あふ夜のまれなる」と「夢の合ふ世の稀なる」と、二かたにかけたる詞也。

**釈** 下句は、その夢のうちにかきまぎれてむなしくならまほし、との意也。「ともがな」は、願ふ意の辞。

世がたりに云々

**釈** 初二句は、うき身を夢になしてむなしくなるとも、ためしなき世がたりにいひ伝へんがかなし、との意也。三句は初句の上に置いて心得べし。**玉** 「さめぬ夢」とは、夢さめて又本の現にかへる物なるを、夢になしてきゆる身はかへることなきをいふなり。

心もとなうおもほす』藤つぼの宮なやみ給ふ事ありて、まかで給へ  
マチドホ 病惱 △御里△

り。うへのおぼつかながりなげき聞え給ふ御けしきも、いといとほ  
源心 帝

しう見奉りながら、かかるをりだにと、心もあくがれまどひて、い  
デモ△セメテ△アハン△ ムリヤリニテ ウチマデ 現

づくにもいづくにもまうで給はず、内にてもさとにても、ひるはつ  
責 △命婦△

くづくとながめくらしして、くるれば王命婦をせめありき給ふ。いか  
貴

がたばかりけん、いとわりなくて見奉るほどさへ、うつつとはおぼ  
計

えぬぞわびしきや。宮もあさましかりしをおほしいづるだに、よと  
キヨウサメ サへ 常住

ともの御物思ひなるを、さてだにやみなんとふかうおぼしたるに、  
ガ サウシテデモ ヤメ

いと心うくて、いみじき御けしきなるものから、なつかしうらうた  
メイワクナル モノノ △サスガニ△ カハユラシ

げに、さりとてうちとけず、心ふかうはづかしげなる御もてなしな  
ゲ サウチャトテ

どの、なほ人々にさせ給はぬを、などかなのめなる事だに、うちま  
源心 △ツネ△ ドウシテ ユガンダ デモ

じり給はざりけん、とつらうさへぞおぼさるる。何事をかは聞えつ  
ゼリ

くし給はん。くらぶの山にやどりもとらまほしげなれど、あやに  
＊ ◆

くなるみじか夜にて、あさましう中々なり。  
ナマナカ

見てもまたあふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるるわが身とも  
＊ 源

がな。とむせかへり給ふさまも、さすがにいみじければ、  
咽 鳴 キノドク アハレ

世がたりに人やつたへんたぐひなくうき身をさめぬ夢になして  
＊ 藤つぼ

も。おもほしみだれたるさまも、いとことわりにかたじけなし。命  
モットモ アリガタイ モツタイナイ

御なほしなどは

**新**直衣などもそこなくぬぎ捨たりしを、命婦のとりまかなひてきて出し参らせし也。源は別の悲みにうつつともなきさまをしらせて云うなるべし。

殿におはしてなきねに

**万**二条院に也。

**玉**「なきね」は泣ながらに眠るをいふ。

**拾**六帖夕されば君をまつちの山鳥のなくなくぬるを立もきかなん御らんじいれぬよしのみあれば

**湖**藤つぼの源氏の文をも見給はぬよしを、王命婦などより申すなるべし。

またいかなるにかと

**細**源の病惱を又いかにかと内におほしめべきも、それさへおそろしと也。**釈**「又」とは、瘧病の後なる故にいへり。湖月師説はひがこと也。

なやましさをまさり

**岷**かさねて源にあひ給へるを心うきことにおほしなげくから、御なやみもおもるなり。

**釈**なやみ給ふ事有てまかで給ふをりなる故に、「まさり給ひて」とはいへり。

人しれずおほすことも

**細**懐妊の事也。

**湖**悪疽などの心ばへにや。

三月になり給へば云々

**花**「三月」を「みな月」とかける本もあり。藤壺女御ただもなくなり給ひて三月ばかりに成給ふ也。此三四月の比、御心ちわづらひて御さとにましましける時、源氏君近づきより給ひしより御懐妊有て、卯月の比よりは六月は三月ばかりになる也。さるほどに、「みな月」とかける本も心はちがはぬ也。かくて、あくる年の二月十四日に冷泉院は生れ給ふ。十一ヶ月にあたれるにや。

御すぐせ

**釈**例の前世の宿縁也。

この月まで

**湖**帝へ申上給はぬを驚きあやしむ也。

わが御心ひとつには

**湖**師源氏の御子を懐妊し給ふ心なり。

御めのとこの弁命婦などぞ

**玉**弁と命婦と二人にて、命婦は王命婦也。「かたみに」は、弁と命婦とたがひに也。さて「猶のがれがたかりける」といふは、命婦一人が思ふ也。さる故に「命婦は」と二たび名をいへり。源氏君の密通の事は、弁はしらず、命婦のみしれる事なる故に、かく分ていへるなり。

うちには御もののけのまぎれにて

**釈**『御物のけのさはり有て、御懐妊の事、とみにはけしきなくてしらがたかりし故に、奏せざりし』とことわり申すなるべし」と、地より評じてかける也。いとすきまなき事といふべし。

いとごあはれに

**岷**帝の御心、いよいよ藤つぼに御思ひまさるなり。

婦の君ぞ、御なほしなどはかきあつめもてきたる。殿におはして、

なきねにふしくらし給ひつ。御文なども、れいの御覧じいれぬよし

のみあれば、つねの事ながらもつらう、いみじうおぼしほれて、う

ちへもまぬらで、二三日こもりおはすれば、またいかなるにか、と

御心うごかせ給ふべかめるも、おそろしうのみおぼえ給ふ。宮も猶

いと心うき身なりけり、とおほしなげくに、なやましさをまさり給

ひて、とく参り給ふべき御つかひしけれど、おもほしもたらず。ま

ことに御心ちれいのやうにもおはしまさぬは、いかなるにか、と人

しれずおほすこともありければ、心うく、いかならんとのみおぼし

みだる。あつきほどはいとどおきもあがり給はず。三月になり給へ

ば、いとしるきほどにて、人々見奉りどがむるに、あさましき御す

ぐせのほど心うし。人はおもひよらぬことなれば、この月までそ

せさせ給はざりけること、とおどろき聞ゆ。わが御心ひとつには、

しるうおぼしわく事もありけり。御ゆどのなどにも、したしうつか

うまつりて、何事の御けしきをも、しるく見奉りしれる、御めのと

子の弁、命婦などぞあやしと思へど、かたみにいひあはずべきにあ

らねば、なほのがれがたかりける御すぐせをぞ、命婦はあさましと

思ふ。うちには御物のけのまぎれにて、とみにけしきなうおはしま

しけるやうにぞそうしけんかし。みな人もさのみ思ひけり。いとど

あはれにかぎりなうおぼされて、御つかひなどひまなきも、そらお

さまことなる夢を見給ひて

〔花たとへば、源氏の北の方の御腹に御子いでき給ひて、御位につかせ給べきさまの御夢にあはする也。さて「おぼしもかけぬ」といへり。

〔積〕あはする者とは、夢占の博士也。そのかみはさるものもありきかし。万水一露の説、占者の詞めきてよし。

〔万〕此御夢を相せさすれば、「御子三人あるべし。一人は天子、一人は后、一人は大臣なるべき」よしをうらなふ也。

そのなかにたがひめありて

〔新〕その夢をあはせてみれば、上をおかしてその罪にあたるべきなどの心有つらんをいふ也。かの須磨のうつろひの事も、朧月夜の事のみならで此天のどがめもあるべし。むくいなどいふは、此記者の意也。

〔積〕花鳥に左遷の事にはなきやうに注せられたるは、わろし。「つつしませ給ふべき事」といへる、正しく左遷の事をさしたりと聞えたるをや。

〔評〕此夢の占に、源氏君生涯の禍福の伏案を立られたること、かの桐壺卷の相人の詞と同じき中に、こほはやや委しくなりたり。末の巻に照してよく味はふべし。

みづからの夢には

〔積〕「たがひめありて」といふを聞いていまいまいおぼえ給ふ上に、及びなきさまの事を合せたれば憚り給ひて、「これは我夢にあらず、人の夢をかたるなり」といひまぎらはして、さて「人に語るな」と占者に口がため給ふなり。旧注無用の説おほし。

この宮の御事聞給ひて云々

〔積〕藤壺の宮の御懐妊の事を聞給ひて、もしやかの夢合する者のいへるさまにやなど思ひ合せ給ふ故に、今一たび逢見んの心にて、いみじく言のはを尽し給ふ也。

むくつけう云々

〔岷〕命婦も空おそろしくなり、藤壺もいよいよおぼしこりたる也。

〔積〕案に、「命婦も思ふに」とあるにもじの結び、たしかならぬこちらず。もしくは詞脱たるか。「たばかりるべきかたなし」とあるしは、くどや有けん。さては下文へのつづき少し聞よかるべし。

七月になりてぞ

〔岷〕藤壺参内也。

〔細〕懐妊四ヶ月なるべし。

ふくらかに

〔細〕懐妊のさま也。

げににるものなく

〔玉〕「げに」とは、帝の御思ひかぎりなきも「げに」也。こなたにのみ

〔万〕天子つねに藤壺にのみおはしますと也。

御あそびもやうやう

〔花〕世もやうやう涼しくなる比なれば也。

しのびがたきけしきの

〔岷〕源の思ひあまるさまなるべし。

〔積〕「をりをり」の下に詞落たるべし。今、はもじひとつ補ひて、その心をつらぬけり。猶考ふべし。

さすがなる事どもを

〔積〕さはいふものの、あはれる源氏君の御うへを思ひつづけ給ふなるべし。

出給ひにけり

〔積〕尼君、北山をいでて京へかへり給ふ也。

そろしう、物をおもほすことひまなし。中將の君も、おどろおどろ

源氏 ギヤウサン

しう、様さまことなる夢を見給ひて、あはするものをめしてとはせ給

二 合 者 召

へば、およびなう、おぼしもかけぬすぢの事をあはせけり。其中に

及 合

たがひめありて、つつしませ給ふべき事なん侍る、といふに、わづ

ユキチガヒ 慎 コメ

らはしくおぼえて、みづからのゆめにはあらず、人の御ことをかた

ンダウニ 自 身

るなり。この夢あふまで、また人にまねぶな、とのたまひて、心の

合 カタルナ

うちには、いかなる事ならん、とおぼしわたるに、この宮の御事き

△懐妊ノ

き給ひて、もしさるやうもや、とおぼしあはせ給ふに、いとどしく、

△アラン 合

いみじきことのはをつくし聞え給へど、命婦も思ふに、いとむくつ

オモヘバ オソロ

けうわづらはしさまさりて、さらにたばかりるべきかたなし。はかな

シクメンダウシサ 更 クカ ツイシ

きひとくだりの御かへりの、玉さかなりしもたえはてにたり。七月

タ 絶 竟 △藤ツボ

になりてぞ参り給ひける。めづらしくあはれにいとどしき御思ひ

△内ノ 帝御心

のほどかぎりなし。すこしふくらかになり給ひて、うちなやみ、お

△御腹ノ

もやせ給へるはた、げににるものなくめでたし。れいのあけくれこ

面 モマタ 似 藤

なたにのみおはしまして、御あそびもやうやうをかきころなれば、

靈 バカリ 管絃也 ソロンロオモシロキジセツ

源氏の君も、いとまなくめしまつはしつ、御琴笛など、さまざま

ヒマナク 召

につかうまつらせ給ふ。いみじうつつみ給へど、しのびがたきけし

源 カクシ コラハラレメ

きの、もりいづるをりをり(は)、宮もさすがなることどもを、おほ

漏 出 藤ツボ

くおもほしつづけけり』かの山でらの人は、よろしうなりて出給ひ

尼君 △病

にけり。京の御すみかたづねて、ときどきの御せうそことなどあり。

イのナン オトツレ

おなじさまにのみ

岷いどけなきよしのみ返事のある也。

ありしにまさる。

〔花謙徳公集〕わすれなん今はと思ふときにごそありしにまさる物思ひはすれ。今案、藤つぼの御事也。

秋の末つかた

〔孟〕前に「七月になりて」と有て、ここに「秋の末つかた」と有。心をつくべし。

からうじて

〔秋〕しひて心にもそまぬを思ひたち給へる故に「からうじて」といへるなるべし。

しぐれめて打そそぐ

〔秋〕人を問につきづきしき為の時雨なるべし。

六条京極わたりにて

〔秋〕夕顔巻よりの脈をここにあらはしたり。御息所なる事は論なし。されど、ここには猶あらはさず、伏線の用意、心をつくべし。

こぐらう見

〔湖〕木蘭之。庭樹の茂きさまなり。

こあぜちの大納言の

〔岷〕惟光の源へ申す也。紫上の外祖父也。

かの尾上いたうより

〔花〕上には「よろしうなりて」と書て、今又かくいふは、老病にて再発せるにや。

〔秋〕上に「四十あまり」とあれば、老病ともいひがたきか。とにかくに、物思ひ病のごとくかきなしたるなり。

わざとがっ

〔細〕ついでならでわざと、といはする也。

かたはらいたき事かな

〔秋〕尼君のたのもしげなくなりて対面し給はぬが、笑止に気毒なる意也。

むつかしげに侍れど

〔箋〕見苦しき所のさま、聊爾なれども、と也。

かしこまりをだに

〔余〕ここは御礼を申すといふ意也。

物ふかきおまし所

〔箋〕「物ふかき」とは、余りに俄なる故、御座所のはしぢかなるを、わざと狂言にかくのごとく申す也。

〔玉〕これは「物げなき」を写し誤れるなり。本のままにては聞えぬこと也。注はしひこと也。

〔秋〕ひさしははしつかたなれば、「もの深き」とはいふべからず。箋の義もここにはにつかはしからず。狂言もここにこそよれ、かかる所にいはんものかは。小櫛のごとくなるべきか、もしくは「物ふるき」かとも思へど、さてもなほ穩ならず。「物ふかからぬ」などいひてかなふべき所也。猶考ふべし。

げにかかる所は

〔弄〕源もならひ給はぬさまにおぼす也。

つねに思ひ給へたちながら

〔万〕源もつねに御出ありたきとおぼしめせども、いひより給ふごにいまだをさなきとて御同心もなければ、つつまじきに、おのづから尼公のおもらせ給ふをもしろしめさぬ、と也。

\*おなじさまにのみあるも、ことわりなるうちに、この月頃は、あり  
〔御返事〕

しにまさる物思ひに、こと事なくてすぎゆく。秋のすゑつかた、い  
異

ともの心ぼそくて、なげき給ふ。月のをかしき夜、しのびたるとこ  
ナニトナク

ろに、からうじて思ひたち給へるを、時雨めてうちそそぐ。おは  
ヤウヤウノコトデ

する所は六条京極わたりにて、うちよりなれば、すこしほどとほき  
ヘン

こちするに、あれたる家の木だちいものふりて、こぐらう見え  
荒

たるあり。れいの御どもにはなれぬ惟光なん、こあぜちの大納言の  
ナニトナクフルヒテ

家に侍り。ひと日物のたよりにとぶらひて侍りしかば、かのあまう  
コトノヒンギ

へいたうよわり給ひにたれば、なに事もおぼえず、となん申て侍り  
〔中納言下ガ〕

し、と聞ゆれば、あはれのことや。とぶらふべかりけるを。などか  
源詞

さなんとも物せざりし。いりてせうこそせよとの給へば、人いれて  
入

あないせさす。わざとかうたちより給へること、といはせたれば、  
〔源〕

いりて、かく御とぶらひになんおはしましたるといふに、おどろき  
〔権光ノ使〕

て、いとかたはらいたき事かな。この日頃むげにいとたのもしげな  
〔尼君〕

くならせ給ひにたれば、御たいめんなどもあるまじ、といへども、  
〔対面〕

かへし奉らんはかしこし、とて南のひさしひきつくろひていれ奉る。  
〔源〕

いとむつかしげに侍るめれど、かしこまりをだにとてなん。ゆくり  
イ侍れど

なう物ふかきおまし所になんと聞ゆ。げにかかる所はれいにたがひ  
ムサクロシウ

ておぼさる。つねに思ひ給へたちながら、かひなきさまにのみもて  
ケナク

なさせ給ふに、つつまれ侍りてなん。なやませ給ふ事をも、かくと  
ハチラハレ

みだりごちはいつともなく云々

〔孟〕違例の事を内より尼公の返答也。

〔釈〕みだり心ちのなやましきは、いつともなく常の事になりたれば、そはともかくも侍れ、臨終のさまになりてかく忝くとぶらひ給へるに、みづから対面して直に答へ奉らぬことよ、と先無礼を謝し給ふ也。

わりなきよはひすぎ侍りて

〔細〕いとけなき也。年齢もかさなりてとなり。

かずまへさせ給へ

〔万〕源の思ひ人の数になし給へ、と也。

ねがひ侍る道のほだし

〔細〕後生のさはりともなるべき、と也。

いとちかければ

〔細〕程なき家居なれば、かくいふ声をも源の間給ふ也。「たえだえ聞えて」といふにてよみきるべし。

此君だに

〔釈〕紫上みづからかしくまりをも聞え給ふべきほどの年ならばうれしからん、との意なり。「かしくまり」は、礼をいふといふ心也。

なにかあさう思ひ給へらん事ゆゑ

〔釈〕源氏君の詞也。ひとり言といふ旧注はひがこと也。あさく思ふ事ならば、かくをさなき人にすぎずきさまを見え奉らんや、といふ意也。

いかなるちぎりにか云々

〔釈〕「ちぎり」は例の宿縁也。いかなる前世の宿縁にかあらん、見ぞめしよりあはれに思ひ聞ゆるも、我ながらあやし、と也。「まで」の下、少し詞足ぬこちす。

〔玉〕此世のみの事にはあらじ、前の世よりの因縁にこそ、と也。過現未三世の事といふ注は、いみじきひがこと也。

かひなきこちのみ

〔釈〕まゐりてもかひなき心ちのみするを、せめて紫上の声をだに聞んどのたまふ也。

よろづおもほししらぬさまに

〔玉〕尼君のいたくよわり給へることなどを、何ともおぼしいれぬよしの意なり。

きこゆるをりしも

〔釈〕わづらはしき故に、紫上はねいりて居給へりといひなすをりしも、何心なく紫上のこなたへ出来給ふ也。はしたなきさまを、いとよくうつし出られたり。今もをりをりあるさま也。

うへこそ

〔釈〕紫上の尼上を呼かけ給ふ詞也。こそといふ詞の事、夕顔の釈に注せるがごとし。必しも尊びていふ語にはあらず。

この寺にありし

〔釈〕かの北山の寺にありしといふ也。このは「かの」の意也。

いさ見しかば云々

〔釈〕「いさ」の詞、誤注のごとし。尼君などの、源氏君を見しかば心ちのあしきもなぐさみつとの給ひし事を、紫上の聞おぼえをりて、かしく事聞たりと思ひて、今源氏君の来給へるをしらせんとて、はしり来てのたまふさま也。幼き人のさまをいとよくうつされたり。

人々のくるしと思ひたれば

〔細〕源の用意也。紫上とは知給へ共、人々くるしげに思ひたるさまをみしり給ふ故に、聞ぬさまなし給ふ也。

もうけ給はらざりけるおほつかなさ、など聞え給ふ。みだりごち

\*尼君詞女房伝

はいつともなくのみ侍り。かぎりのさまになり侍りて、いとかたじ

イ

命終

けなくたちよらせ給へるに、みづから聞えさせぬこと。のたまはず

ガ

マウシアゲヌ

△カフ

る事のすぢ、たまさかにもおぼしめしかはらぬやう侍らば、かくわ

紫上ノコト条

万ノ一

\*

りなきよはひすぎ侍りて、かならずかずまへさせ給へ。いみじく心

齡

過

必

数

ぼそげに見給へおくん、ねがひ侍る道のほだしに思ひ給へられぬ

置

\*

後生

騙

絆

べき、など聞え給へり。いとちかければ、心ぼそげなる御声、たえ

\*

近

△尼君

絶

だえ聞えて、いとかたじけなきわざにも侍るかな。此君だにかしこ

尼君詞

\*

紫

まりも聞え給ひつべきほどならましかば、との給ふ。あはれにきき

源

△ウラシ

△カラマシ

給ひて、なにかあさう思ひ給へんことゆゑ、かうすぎずききさま

詞

浅

イ

給へらん

をみえ奉らん。いかなるちぎりにか、見奉りそめしより、あはれに

ミ

セ

\*

宿縁

△アラシ

思ひ聞ゆるも、あやしきまで、この世の事にはおぼえ侍らぬ、など

フシギナ

△コト三

のたまひて、かひなきこちのみし侍るを、かのいはけなう物し給

\*又源詞

△キキ侍

ふ御ひとこゑ、いかでか、との給へば、いでやよろづおぼししらぬ

女房を詞

\*

さまに、おほとのごもりいりて、など聞ゆるをりしも、あなたより

彼方

\*

くるおとして、うへこそ、この寺にありし源氏の君こそおはしたな

尼上

カノ

\*

△キキ侍

れ。など見給はぬ、とのたまふを、人々いとかたはらいたしと思ひ

アアヤカマン

イサヤ

イメ

て、あなかまと聞ゆ。いさ、見しかば心ちのあしきなぐさみき、と

イサヤ

イサヤ

イメ

の給ひしかばぞかし、とかしこき事ききえたり、とおぼしての給ふ。

聞

得

いとをかしときき給へど、人々のくるしと思ひたれば、聞ぬやうに

源

イ

\*

メイワクナ

源

イ

イ

イ

イ

源

イ

イ

イ

イ

源

イ

イ

イ

イ

げにいふかひなの  
〔**畷**〕尼公のたまふごとく、まことにいはけなき也。さりながら、よくをしへたててみたまよし也。

れいのちひさくて  
〔**釈**〕いつものごとく、紫上への御文は小さくしていれ給ふ也。いはけなき

〔**船**〕は源氏君みづからのたとへなり。

〔**玉**〕「あしまになづむ」は、思ひなやむをたとへたり。「えならぬ」は「浅からず」にて、思ひなやむことの浅からざるよし也。「え」に「江」をもたせたり。「えならぬ」の旧注どもみだり也。

おなじ人によと

〔**拾注**〕湊入の芦わけ小船さはりおほみ同じ人によ恋んと思ひし。是は誤なり。古今堀江ごたななし小舟こぎかへりおなじ人によこひわたりなやがて御手本にと

〔**釈**〕此御文をそのまま紫上の手ならひし給ふ本にし給へ、といふ也。とはせ給へるは云々

〔**細**〕少納言が文の詞也。尼公は北山へ出給ふ也也。

〔**新**〕この比は、病て死んずるほどには山寺へわたして、寺にて終るさまにせし也。かくのごとき様、蜻蛉日記にも見え、古歌のはし書にも、おやの喪に山寺にこもりたる事あるも、さる類と見ゆ。出家したる人は、殊にさもするにや。

この世ならでも

〔**釈**〕この世ならでも、のちの世より申さん、と也。げにいとあはれ也。心のいとまなくのみ

〔**釈**〕「いとまなくのみ」とよみ切て、「おぼしみだるる人の御あたりに」とつづけてよむべし。「おぼしみだるる人」とは、藤壺の御方なり。それに心のいとまなく思ひかけ給ふよし也。

あながちなるゆかりも

〔**釈**〕「あながちなる」とは、幼きをあながちに尋ねよる意也。「ゆかり」は、藤つぼのゆかりの紫上をさせり。きえん空なきと

〔**細**〕「おひたたんありかもしらぬわか草をおくらす露ぞきえん空なき」

とよみし時の事など思ひ出給ふ也。

見おとりやせん

〔**細**〕源切に思ひ給ふ故に、自然ちかく見はみおとりやせんとおぼす也。〔**釈**〕「さすがにあやふし」といへる、いとめでたし。

手につみて

〔**河**〕此歌、紫の名の元始也云々。「根にかよひける」とは、藤壺女御のゆかりといふ也。古今紫の一もとゆゑにむさしの草はみながらあはれとぞ見る、といふ歌の心也云々。

〔**細**〕いつかわが物にすべきの心也云々。

〔**釈**〕眠江入楚に此歌の時節の論あり。いたづらこと也。用るまじき也。此歌の下に詞をはぶける、いとめでたし。『野へのわか草』は、かの「消ん空なき」といふ歌より引もて来れる也。

十月に朱雀院の行幸有へし

〔**花**〕朱雀院は後院也。天子脱履の後の御在所也。三条朱雀に四町に造られたり。延喜の御宇には、宇多の御門を朱雀院と申侍り。十月の行幸は紅葉賀の事なるべし。

〔**釈**〕この行幸の事、未摘花巻にも見えて、そのいとまみの事も見えたり。これ紅葉賀巻と引合せて、とりつなぎたる照応の法なり。猶そこにもいふべし。

やんことなき家のこと

〔**畷**〕舞人は、摂家・大臣家以下の子どもも出る事也。されば源氏・頭中将などもまひ給ひし也。そのかたに

〔**湖**〕舞樂の方に也。

とりのりぎん  
〔**釈**〕「ぎん」は「才」にて、音楽の器用をさす。琴笛いろいろの芸をならひ給ふ也。「ならひ給ふ」の下、にもじ落たることしるれば、今補ひつ。なくては聞えぬこと也。「いとまなし」のしは、くの誤にはあらじか。しかあらんかた下へのことわりたしかなり。

山里人にも久しう

〔**玉**〕「いとまなし」といふよりつづきて、源氏君も舞などならひ給ふにいとまなくて、といふ意をふくめたり。

〔**釈**〕上にいへる釈の意考ふべし。「山里人」は、尼君・紫上をさすなるべし。

て、まめやかなる御とぶらひを、聞えおき給ひてかへり給ひぬ。<sup>＊源心</sup>げ

にいふかひなのけはひや。さりとも、いとようをしへてんとおもほ

す。またの日も、いとまめやかにとぶらひ聞え給ふ。れいのちひさ

くて、

いはけなきたづのひとこゑききしよりあしまになづむ船ぞえなら

ぬ。<sup>＊</sup>おなじ人によ、とことさらをさなくかきなし給へるも、いみ

じうをかしげなれば、やがて御手本にと人々聞ゆ。少納言ぞ聞えた

る。<sup>＊</sup>とはせ給へるは、けふをもすぐしがたげなるさまにて、山でら

にまかりわたるほどにて、かうとはせ給へるかしこまりは、この世

ならでも聞えさせん、とあり。いとあはれとおぼす。秋のゆふべは、

まして心のいとまなくのみ、おぼしみだるる人の御あたりに、ここ

ろをかけて、あながちなるゆかりも、たづねまほしき心も、まさり

給ふなるべし。きえん空なきとありしゆふべ、おぼし出られて、恋

しくもまた見おとりやせん、とさすがにあやふし。

手につみていつしかも見んむらさきのねにかよひける野へのわか

草<sup>＊</sup>十月に朱雀院の行幸あるべし。まひ人など、やんことなき家の

子ども、上達部殿上人などもなども、そのかたにつきづきしきは、み

なえらせ給へれば、みこたち大臣よりはじめて、とりどりのざえど

もならひ給ふに、いとまなし。山ざと人にもひさしうおとづれ給

はざりけるを、おもほしいでて、ふりはへつかはしたりければ、僧

はざりけるを、おもほしいでて、ふりはへつかはしたりければ、僧

はざりけるを、おもほしいでて、ふりはへつかはしたりければ、僧

はざりけるを、おもほしいでて、ふりはへつかはしたりければ、僧

たちぬる月

●「たち」は、月日のたつといふたつにて、過にしをいふ。

せけんの

岷 「世間の道理」也。僧都に似合たる詞也。

あはれに

●「こ」にてよみ切べし。

こひやすらんと

●玉 どもじ、多くの本にこどあり。どとは一本にある也。「故」といふこともあらまほしけれど、どといふことは必なくてはかなはぬ所也。もしは、「恋やすらんと、こ御息所に」と有しを、たがひに落せるにやあらん。●此説によりて、今仮にこもじを補へつ。「故」といふことも必あるべき前後の例也。

こみやす所に

●細 桐壺の更衣にはなれ給ひし時の事まで思ひ給ふ也。はかばかしからねど

●積 源氏君三才の時なれば也。

いみなど過て

●湖 祖母の服は三月、暇は三十日也。ここは三十日の暇あきたる也。

●細 紫上京へ出給ふ也。

れいの所に

●岷 前にありし南のひさしなるべし。

都のかへりことのみあり。＊文の詞たちぬる月の二十日のほどになん、つひスギ

にむなしく見給へなして、せけんの＊世間だうりなれど、かなしび思ひ給空

ふる、などあるを見給ふに、世中のはイセかなきもあはれに、うしろめ△尼君ノキニカカ

たげに思へりし人もいかならん。をさなきほどに恋やすらん、と紫

●こみやす所ンにおくれ奉りしなど、はかばかしからねど、思ひいでて、桐壺更衣

あさからずとぶらひ給へり。少納言ゆゑなからず、御返しなど聞え

たり。いみなどすぎて、京の殿になん、と聞給へば、ほどへて、み源

づからのどかなる夜おはしたり。いとすぐげにイなどあれたる所の、人ず△カヘレル

くなるに、いかにをさなき人、おそろしからん、とみゆ。れいの幼

所にいれ奉りて、少納言御有さまなど、うちなきつつ聞えつづくる△源ヲ

に、あいなう御袖もただならず。宮にわたし奉らんと侍るを、こひ少納言詞

め君の、いとなさけなくうき物に思ひ聞え給へりしに、いとむげにツライコト

ちごならぬよはひの、またはかばかしう人のおもむけをも見しり給乳児

はず、中空なる御ほどにて、あまた物し給ふなるなかの、あなづらドチラヘモツカヌ

はしき人にてやまじり給はんなど、すぎ給ひぬるも、よとともにお年ノホト也

ぼしなげきつるもしるき事おほく侍るに、かくかたじけなきなげの著多

御ことのはは、後の御心もたどり聞えさせず、いとうれしうおもひ△マツ

給へられぬべき、をりふしに侍りながら、すこしもなずらひなるさサケリ

まにも物し給はず、御年よりもわかびてならひ給へれば、いとかた幼習

はらいたく侍り、と聞ゆ。なにかかうくりかへし聞えしらする心の源詞

ただならず

●積 涙にぬるる事也。

こひめ君の

●紫上の実母也。紫上を宮のかたへわたし奉るをば、故姫君なさけなくうき物に思ひ給ひし、と也。

いとむげに云々

●細 岷 一向に二歳三歳の時ならば無分別にてもありぬべし。紫ははやしばかりにも成給へば、他人の中のすまひもいかが、と也。

まだはかばかしう

●岷 紫のまだ十ばかりなれば、又人のおもむきをしるほどにもなき、と也。それを「中空なる」といへるにや。中半なる心也。

あまた物し給ふ中の

●花 兵部卿宮の御むすめ、今の北方のはらに女一人、冷泉院の女御なり。又一人、ひげぐるの大將の室也。その外は系図にのせず。

しるき事おほく

●積 継母のおもむけ、かねて尼君の歎き給ひしもいちじるく見ゆる事多き也。

なげの御ことは

●積 「無気」とは、有げにもなきとの意也。かくかたじけなくの給ふは、ありげにもなき御詞ながら、後に御心のかはるとかはらぬをもとはず、まづいとうれしき折ふし也。さはあれど、紫上の、源氏君の御めになり給ふべきさまにもあらず、年よりもをさなくおはすれば、きのどく也、といふ意也。「なづらひ」とは、御妻に准ふといふ心の体言なり。

なにかかうくりかへし云々

●積 此所、意とほらす。案に、「つつみ給ふらん」とあるは「つつみ給へん」と有しを写しひがめたるなるべし。其故は、「かうくりかへし聞えしらする心のほど」といふまでは源氏のみづからのうへへの給ふなるに「つつみ給ふらん」とては少納言がつつむ事となり。されば、必しか有しにこそ。一本には「給らん」と書たり。やちかかし。さてこれは、「なげの御ことは」などいへるに答へて、かうくりかへししいひしらする心のほどを、何かつつみ侍ん、とのたまへる也。かくて心明らけし。注ども皆ひがこと也。

ゆかしうおぼえ給ふも

〔**釈**こも源氏みづからの給ふなれば、「給ふるも」と有べきこと著ければ、今補ひつ。あしわかの云々

〔**釈**紫上に対面はしがたくとも、物ごしに立ながら此ままにかへるべき事かは、といふ意也。故に「げにこそいとかしこけれ」とはいへる也。「わかわかの浦」に紫上の幼きをよそへ、「海松」に「見る目」をそへたる也。若若の浦の説、拾遺のごとし。別に記しつ。

〔**玉**結句「かへるべき波かは」といふべきを、「かへる波かは」といへるは、すこしいかが。よる波の云々

〔**釈**よりくる源氏君の御心をもしらずして、なびきしたがひ給はんは、うきたる事ならずや、といふ意を、わかわかの浦の波によせていへり。「玉藻」は、海藻に丸き実のあるをいふと先達はいへりき。「なびかん」「うきたる」、皆藻の縁にて、上の歌の海松をうけたる也。「わかわかの浦」は、「あしわかわかの浦」をうけて紫上をふくめたるは勿論也。旧注粗くして、事の心聞とりがたし。わりなきこと

〔**玉**「立ながらかへるべきかは」とのたまふはわりなきこと也、といへるなり。つみゆるされ給ふ

〔**釈**すべて罪を免すなどいへばことごとしく聞ゆれど、ただそのかひの有ほどの事にいへり。今俗、某々ノカハリなどいふにちかし。紫上をあひ見ぬいふせさに、少納言が物なれたるをかへて免す意也。なぞ「えざらん

〔**河**入しれず身はいそげども年をへてなごえざらんあふ坂の関

〔**余**後撰集恋三・伊尹朝臣、初句「人しれぬ」、四句「なごえがたき」と有。

〔**釈**「こえがたき」を「越ざらん」とて引たるは、例の筆也。「恋ざらん」とある本はことわりなし。河海はおぼえそこね給へるなるべし。さてこの意は、年をへなばなどは逢といふ関も越ざらん、と也。いとをかし。みあそびがたきとも

〔**岷**紫の御遊びのときども也。

おもほしはなつべうも

〔**湖**我も他人と思ひ放すべくもあらぬものよ、と也。

はづかしかりし人と

〔**釈**上に「御子になりておはしませよ」などいひし人なれば、「はづかしかりし人」とはいへる也。しもじ心をつくべし。いざかし

〔**新**「いざ」は率なふ詞、「かし」は願ふ詞にて、「ゆけかし」「こよかし」の「かし」に同じ。ねふたきに

〔**釈**眠痛の意にて、眠の甚しき也。さてこの文、幼児のさまをゑがけるがごとし。さればこそ

〔**細**御覽せよ、いまだかくいふかひなき御さまなる物を、と乳母の申す也。

手をさしいれてさぐり給へれば  
〔**細**上にきぬをかいとり給ふなるべし。其あはひへ手をいれて髪をさぐり給ふなるべし。

ほどを、つつみ給ふらん。そのいふかひなき御有さまの、あはれに

給へんナルベン

カクシ

ゆかしうおぼえ給ふるも、ちぎりことになん心ながら思ひしられ

宿縁殊

△ワカ

ける。なほ人づてならで、きこえしらせばや。

伝

イヒ

あしわか源のうらにみるめはかたくともこはたちながらかへるなみ

コレハ

かは。めざましからむとの給へば、げにこそいとかしこけれとて、

シンダグワイナラン

少納言詞

ナルホド

オソレオホイ

よる波少納言の心もしらでわか源の浦に玉もなびかんほどぞうきたる。わ

ム

りなきことと聞ゆるさまの、なれたるに、すこしつみゆるされ給ふ。

リナル

モンナレ

なぞこえざらん、とうちずじ給へるを、身にしみてわかき人々お

イヒ

論ン

染

若

女房タチ

もへり。君はうへをこひ聞え給ひて、なきふし給へるに、御あそび

紫

尼上

恋

泣

臥

がたきどもの、なほしきたる人のおはする、宮のおはしますなめり、

アヒテ

直衣

△△父宮

と聞ゆれば、おきいで給ひて、少納言よ。なほしきたりつらんはい

起

出

下

づら。宮のおはするか、とてよりおはしたる御こゑ、いとらうたし。

ウチャ

コラソ

カハユラシ

宮にはあらねど、またおもほしはなつべうもあらず。こち。とのた

源詞

寄

放

此方へ

まふを、はづかしかりし人と、さすがに聞なして、あしういひてけ

源

トリ

り、とおぼして、めのとにさしよりて、いざかしねふたきに、との

乳母

倚

サアモウ

△ネン

たまへば、今さらなどしのび給ふらん。このひざのうへに御とのこ

源詞

カクレ

膝

上

もれよ。いますこしより給へ、との給へば、めのと乳母ガの、さればこそ。

△近ク

かうよづかぬ御ほどにてなん、とておしよせ奉りたれば、なに心も

イロケナキ

押寄

なくぬ給へるに、手をさしいれてさぐり給へれば、なよよかなる御

源詞

△女中

探

ヤハラカ

そに、かみはつやつやとかかりて、すゑのふさやかにさぐりつけら

衣

髪

スバスバ

サキ

タップリト

アテ

いとつくつくし思ひやらる

〔釈〕此物語のころの女は髪をたれてありければ、何物よりも先髪のためたきをほめたること也。上に紫上の髪のことをたびたびいへりし脈也。心をつくべし。「思ひやらる」とは、きぬの中にて見えぬ故にいへり。

すべり入て

〔玉〕うるはしく歩み行て入るにはあらで、ただ居ながらにじりよりて入やうのさまなるべし。俗言にいふ「すべる」も同じこと也。衣をぬぎすべらかすも、おなじ心ばへなり。

〔釈〕庇の間の御坐より母屋のかたへすべり入給ふなるべし。今はまるぞ思ふべき人

〔湖〕尼君なくなり給ひて後、今は源氏を紫を思ふ人なるぞ、なうとみ給ひそ、と也。聞えしらせ給ふとも

〔湖〕前に「入つてならで聞えしらせばや」との給ひしをうけてみるべし。紫をさなき故、源ののたまふかひもあらじ、と也。さりともかかる御ほどを

〔湖〕源のおしたちて無理わざは有まじき、と也。

あられふりあれて

〔評〕人ずくなにそぞろ寒き情景。

とのる人にて侍らん

〔釈〕我直宿の番人となりてここに伺候せん、との意也。

かきいだきて

〔釈〕一本によりて補ひつ。

わか君は

〔河〕男女ともに「君君」と号す。年わかき義也。

御はだつき

〔釈〕岷江に「紫上のはだつき」とあるはひがこと也。源氏君の御肌つき也。さらでは「おぼしたるを」といふこと聞えがたし。ひとへばかりをおしくくみて

〔岷〕紫にひとへをきせて、かたはらにふせ給ふ也。〔釈〕「おしくくみて」は「おしつづみて」也。ひとへばかりにしておしつづみて、肌こそへ給ふなるべし。

いざ給へよ

〔湖〕源の二条院へ渡し奉らんとおぼす故に、画などある所へ御出あれとさせ給ふ也。

〔釈〕絵」と「ひいな」との脈。

心につくべき事を

〔湖〕紫の心になふべき事をのたまふ也。

れたるほど、<sup>\*</sup>いとうつくしう思ひやらる。てをとらへ給へれば、う

アソバイ

手執

ヒ

たて例ならぬ人の、かくちかづき給へるはおそろしうて、ねなんと

ヨントツネ

近

詞

ネヨウ

いふものを、<sup>\*</sup>とてしひてひきいり給ふにつきて、すべり入て、今は

イシのびて

強

\*源

\*詞

まるぞ思ふべき人。なうとみ給ひそ、との給ふ。めのと、いであな

ワタシ

△ナレ莫疎

乳母

ヤアアレ

うたてや。ゆゆしうも侍るかな。<sup>\*</sup>聞えしらせ給ふとも、さらに何の

アンマリナ

ケンカヲコトニモ

イヒ

しるしも侍らじ物を、とてくるしげに思ひたれば、さりともかかる

カヒ

メイワクサウニ

\*源詞

御ほどを、いかがはあらん。なほただよ<sup>+</sup>にしらぬ心ざしのほどを、

年ノホト也

ヤハリ

セケンニハナイ

見はて給へ、とのたまふ。<sup>\*</sup>あられふりあれて、すぐきよのさまなり。

竟

蔽

降

荒

凄

夜

いかでかう人ずくなにころぼそうて、すぐし給はん、とうちない

源詞

ドウシテ

泣

給ひていと見すてがたきほどなれば、みかうしまありね。物おそろ

格子

オロセヨ

しき夜のさまなめるを、<sup>\*</sup>とのゐ人にて侍らん。人々ちかうさぶらは

△我直宿

近

侍

れよかし、とていとなれがほに、御帳の内に、<sup>\*</sup>かきいだきて入給へば、

△紫ヲ

あやしう思ひの外にも、とあきれて誰も誰もゐたり。めのとはうし

女房ども

居

乳母

キ

ろめたうわりなしと思へど、あらましう聞えさわぐべきならねば、

ニカカリ

ムツサウナ

アラカマシウ

うちなげきつつゐたり。<sup>\*</sup>わか君はいとおそろしく、いかならんとわ

\*紫

ななかれて、いとうつくしき御はだつきも、そぞろさむげにおぼし

戦慄

△源ノ肌

メツタニ

ソソゾト

サウ

たるを、<sup>\*</sup>らうたくおぼえて、ひとへばかりをおしくくみて、わが御

カハユラシク

\*イハ

畏

心ちも、かつはうたておぼえ給へど、<sup>\*</sup>あはれにうちかたらひ給ひて、

ヒミクナゲニ

いざ給へよ。をかしき絵などおほく、ひいなあそびなどする所に、

\*源詞

いざ給へよ

をかしき絵などおほく

ひいなあそびなどする所に

△ユカシ

と心につくべきことをの給ふけはひの、いとなつかしきを、をさな

\*着

さすがに云々

〔評〕小児の様ゑがけるが如し。

夜ひとよ風ふきあるるに

〔評〕あられのなごり。

げにかうおはせざらましかば

〔評〕風と霞とのあるる夜の情を、女房どもの心に結びかけたる余情きはまりなし。

同じくはよろしきほどに

〔評〕紫の年の相応なる程ならば、とささやく也。女房などのいふべき詞つき、げにしかるべし。

めのとほ

〔評〕乳母の心遣ひ見るが如し。

風すこし吹やみたるに

〔評〕「風少し止て出給ふ」とある筆のはこび、今も猶動くがごとし。

事有がほなりや

〔岷〕よのつねのきぬぎぬめきたる、と也。

今はまして

〔釈〕かく見給ひての今はまして也。

明くれながめ侍る所に

〔湖〕源の独住し給ふ二条院へ也。

いかが物おちし給はざりけり

〔釈〕諸本みな「けり」とあれど、「ける」の誤しるければ、今は一本によりつ。「けり」とある本によりていへる説は、ひがごと也。紫のかくてのみ居給はばいかがは物おちし給はざるべき、といふ義にて、けるはおしてきはむる意の也。

此御四十九日過して

〔花〕十一月九日頃尼君の中陰はつる也。此時ははや朱雀院の行幸なども過たるべし。

たのもしきすぢながらも

〔釈〕兵部卿宮は父君にてたのもしくましませど、紫上は尼君の方におはしてよそよそしくおひたち給へれば、我と同じくうとくおぼさん、と也。花鳥いささかたがへり。

今より見奉れど

〔玉〕我はわづかに今よりはじめて見奉れど也。

かへりみがちに

〔釈〕いく度もいく度も願し給ふさま也。

いみじうきりわたれる空も

〔評〕「きり」は用言なること、拾遺にいへるがごとし。風吹やみてきりわたれる空、いとをかし。霜の白きに暁の寒さ思ひやるべし。かれ「まこと」のけさうも云々」といへり。

いと忍びてかよひ給ふ所の云々

〔玉〕此段を書くことは、上に「まこと」のけさうもおかしかりぬべきに云々」といひて、紫上幼き故に、かへるささうさうしくおぼすから、此女の家にお音つれ給ふ也。注に「此段物語のかざりにて、奇妙也云々」とのみあるは、ことならず。

あさほらけ云々

〔細〕「妹が門」、催馬楽也。「うたはせて」などいふあたり、面白し。

〔釈〕此歌、催馬楽の「妹が門」をおもはれたるさまなれど、意はかれにかかはりたるにはあらず。ただ、霧たつ空のまよひにも妹が門はまぎれず、思ひ出られて行過がたし、といふ意のみ也。「まよひ」は、霧のたちてまよはしくたごらはしきをいふ。拾遺に「道をまよふにかねたり」といへるはわろし。

ふたかへり

〔釈〕おしかへして歌ひたる也。

しもづかへ

〔万〕はしたもよりはちと上なる人か、しもにつかふ女也。

き心ちにも、いといたうもおぢず、さすがにむつかしうねもいらず、

いおぼして

みじろぎふし給へり。夜ひとよ風ふきあるるに、げにかうおはせざ

ムグメキ 風

らましかば、いかに心ぼそからまし。おなじくはよろしきほどにお

ドヤウニ

はしまさましかば、とささめきあへり。めのとほうしろめたさに、

△ヨカラマシササヤキ

いとちかうさぶらふ。風すこし吹やみたるに、夜ふかう出給ふも、

\*草子地

ことありがほなりや。いとあはれに見奉る御ありさまを、今はまし

近

てかた時のまもおほつかなかるべし。あけくれながめ侍る所にわた

源詞

し奉らん。かくてのみはいかがが物おぢし給はざりける、とのたまへ

少納言などの詞

ば、宮も御むかへになど聞え給ふめれど、此御四十九日すぐしてや、

父宮

など思ひ給ふなど聞ゆれば、たのもしきすぢながらも、よそよそに

カウシテ バカリ

てならひ給へるは、おなじうこそうとうおぼえ給はめ。いまより見

ドウシテ オンレ

奉れど、あさからぬ心ざしはまさりぬべくなん、とてかいなでつつ、

△我ノ

かへりみがちにて出給ひぬ◎いみじうきりわたれる空もただならぬ

△我ト

に、霜はいとしろうおきて、まことのけさうもをかしかりぬべきに、

△其家ノ

さうぎうしう思ひおはす。いとしのびてかよひ給ふところの、みち

△内ヨリ

なりけるをおぼしいでて、門うちたたかせ給へど、聞つくる人なし。

△ノ中

かひなくて、御ともにこゑある人してうたはせ給ふ。

ヨキ

\*源

朝ぼらけ霧たつ空のまよひにもゆきすぎがたきいもがかどかな。

二 返

とふたかへりばかりうたひたるに、よしばみたるしもづかへをいだ

キノキタリゲナ

して、

下 仕

六三

たちとまり云々

新霧のまがきの隔にて過うくば、はかなき此草のどざしはさるべくもあらねば、霧に道はまどひても妹が門をばたちより給はぬや、ど、まがき「と」とざし」とを合せてよめり。

拾「霧のまがき」とは、霧の物を立へだてて見せぬ事、垣のごとくなればいふ。さて「まがき」とは、万葉に前垣マカキと書たれば、まへのかき也云々。「草のどざし」は後撰恋五イいふからにつらさぞまさる秋の夜の草のどざしのさはるべしやは。

かへるもなさげなれど  
○釈かくいひかけたるに立よらぬも情なれど、明ゆけばはしたなくて、といふ意也。

大とのごもりおきて

玉「ただおき給ふことをかくいふは、おほとのごもりて有しがおき給ふよし也。花にさきちるといふも、ただちる事にて、咲て有しがちる意なるに同じ。

かくべきことのはも

細常の後朝の文にはかはりはたりとなり。さて書べき詞もなき、と也。すさびる給へり

○釈筆をさしおきつつ案じ給ふさまを「すさび」といへり。手なぐさみにするやうの意也。

をかしきゑなど

○釈絵の脈。

かしこにはけふしも

○釈「けふしも」といへるは、源氏君の文やり給ふ日イしもといふ意にて、宮のわたり給へる危さをふくめたる辞也。

なにの所せきほどにもあらず

岨イ所せばきやうにことごとしきほどの紫の御身にもあらず、とのたまふ也。

○釈この御説よろし。湖月に「父宮のもとなれば懼有べきにもあらず」とやうにいへるはわろし。

たちとまり霧のまがきのすぎうくは草のどざしにさはりしもせ

じ。といひかけていりぬ。又人もいでこねば、かへるもなさげな

れど、明ゆく空もはしたなくて、殿へおはしぬ○をかしかりつる人

のなごり恋しく、ひとりゑみしつつぶし給へり。日たかうおほと

ごもりおきて、文やり給ふに、かくべきことのはもれいならねば、

筆うちおきつつすさびみ給へり。をかしきゑなどをやり給ふ○かし

こにはけふしも宮わたり給へり。としごろよりもこよなうあれまさ

りひろうものふりたる所の、いとど人ずくなにさびしければ、見わ

たし給ひて、かかる所には、いかでかしはしも、をさなき人のすぐ

し給はん。なほかしこにわたし奉りてん。なにのところせきほどに

もあらず。めのとほざうしなどしてさぶらひなん。君はわかき人々

などあれば、もろともにあそびて、いとよう物し給ひなんなどの給

ふ。ちかうよびよせ奉り給へるに、かの御うつりがの、いみじうえ

んにしみかへり給へれば、をかしの御にほひや。御そはいとなえて、

と心ぐるしげにおぼいたり。とし比もあつしくさだすぎ給へる人に、

そひ給へるにより、時々かしこにわたりて、みならし給へなどもの

せしを、あやしうとみ給ひて、人も心おくめりしを、かかるをり

にしも物し給はんも、心ぐるしう、などの給へば、なにかは。心ぼ

そくとも、しばしはかくておはしましたん。すこし物の心おもほし

しりなんに、わたらせ給はんこそ、よくは侍るべけれど聞ゆ。よる

かの御うつりが

○釈よき人のたき物は異なる香ありしなるべし。源氏君・薫大将などの

御そはいとなえて

○釈いみじき香にあはせては、御衣のいとくたれたるを心ぐるしく思ひ

あつしくさだ過給へる人に

玉上の「としごろも」は、「物せしを」といふへかかりて、「としごろも云々

といひしを」也。さてこの語の意は、あつしくさだ過たる尼公にそひ

見ならし

新「なたへもわたりて今めきたる事をも見馴し給へとの給ひしを、と

も。されど、次の詞をもかけて見れば、しか見ならし給ふついでに、ま

あやしうとみ給ひて云々

○釈不思議に継母のかたをうとみ給ふ故に、継母も心おくやうなりしを、

すこし物の心

新「少納言が下心には、かくおはしませせて、よきほどに源へすぐ参

はかなき物もきこしめさずとて

〔玉〕此とては、云々どめのとなどの申すが、それ故とて、げにいと云々の意也。

ひるこひ聞え給ふに、<sup>ニ君</sup>はかなき物もきこしめさずとて、<sup>イイトナシ</sup>げにいとい  
たうおもやせ給へれど、いとあてにうつくしく、<sup>貴美</sup>中々見え給ふ。な<sup>宮詞</sup>

にか、<sup>サウハ</sup>さしもおもほす。今は世になき人の御事はかひなし。おのれ<sup>ニ君</sup>

あれば、<sup>心ツヨク</sup>なかたたらひ聞え給ひて、くるればかへらせ給ふを、いと<sup>オホセ</sup>

心ぼそしとおぼいてない給へば、<sup>泣</sup>宮もうちなき給ひて、いとかう思<sup>詞</sup>

ひないり給ひそ。けふあすわたし奉らんなど、かへすがへすこしら<sup>莫入</sup>

へおきて、いで給ひぬ。<sup>慰</sup>なごりもなぐさめがたうなきみ給へり。行<sup>スカシ</sup>

さきの身のあらんことなどまでも、おぼししらず、<sup>年</sup>ただとしごろた<sup>来</sup>

ちはなるるをりなう、<sup>君</sup>まつはしならひて、いまはなき人となり給ひ<sup>亡</sup>

にける、<sup>胸</sup>とおぼすがいみじきに、をさなき御こちなれど、むねつ<sup>△コトヨ</sup>

若紫

はかなき物もきこしめさずとて

〔玉〕此とては、云々どめのとなどの申すが、それ故とて、げにいと云々の意也。

思ひな入給ひて

〔積〕ふかく思ひ入給ふなどなぐさめ給ふ也。

なごりも

〔積〕宮のかへらせ給ひし余波恋しくて、なぐさめがたき也。

ゆくさきの云々

〔岷〕紫の心の中を察してかけり。

〔評〕此段、をさなき人のみなしことなりたるさまをいとよく書とられたり。打よむに、涙もはぶるるこちす。

〔積〕尼君に立はなるるをりなく馴まつはし給ひし也。

なきあへり

〔積〕「あへり」といふは、乳母も人々もといふ意をふくめたるなり。

参りくべきを

〔岷〕源の惟光して仰つかはされたる詞。

しづ心なく

〔積〕紫上の事の案じられて、心おちぬがたき意也。

とのゐ人

〔積〕すなはち惟光など也。

たはふれにても

〔玉〕「かりそめにても」といはんがごとし。旧注に「たとへ源の当坐のたはふれにし給ふとても」といへるはたがへり。かくいふ詞の例をしら

ざる注也。たはふるることにはあらず。

物のはじめに

〔孟〕物のはじめに妾などになしては、兵部卿の聞しめして皆々を御折檻有べき、と也。

あなかしこ云々

〔万〕紫君に、かまへて物のついでにも、父宮へ源氏の御出の事、又直宿人など参る事を、御申あるな、と也。それをは何と也

〔玉〕「それ」とは、今めのとがいふ事の趣をさしていへる也。

ありへてのちや

〔積〕「ありへて」は、在々て月日を経るをいふ。年月を過して紫上成人し給ひて後は、さるべき宿縁のがれずして夫婦となり給ふ事もあらん、と也。

若紫

思ひよるかたなう  
●**釈**にげなきことを、あやしうもかくまで聞え給ふは、いかなる御心とも弁へがたきを、「思ひよるかたなう」といへる也。  
うしろやすう

●**湖**紫上にうしろめたき事なくつかへよ、と也。  
心をさなく

●**釈**紫上を心をさなくもてなすな、よくおどなくかしづけよ、との意也。

ただなるよりは云々

●**釈**語脈点のごとし。かかる御すきごとまただなるよりはわづらはし、といふ意也。「ただなるより」とは、父君の「うしろやすう云々」とのたまへる時なれば、ただ平生よりは源氏君の御すき事のわづらはしう思ひ出られたり、といふ意也。旧注よしなき説どもおほし。  
此人もことありがほに

●**湖**少納言が心也。かやうにいほば、源の紫と夫婦の契もありとや思はんとあいなければ、それほどにことごとしくいはざりし也。  
たいふも云々

●**孟**めのとが事ありがほにはいはぬ物から、「すき事も、思ひ出侍りつる」などいひしを、惟光心得がたくあやしく思ひ侍る也。

参りて  
●**岷**惟光かへり参りて也。

宮よりあすにはかに御むかへにと

●**釈**少納言などの惟光にかたる也。必しも源氏君への御返事とは聞えず。旧注はいかが也。紫上をむかへに人をおこせ給はんと、宮よりのたまはせたる也。  
としころの

●**岷**としころの蓬生あれたる所ながら、さすが別れんもなごりをしき心を、おもしろく書なせり云々。

●**釈**「かれなん」は、はなる事也。離に枯をかねたる、蓬の縁。をさをさあへしらはす

●**釈**あまり惟光をもあへしらはす、物ぬひなどして出たつ支度をするさま也。

大殿におはしけるに

●**釈**葵上の方へ此時にわたらせ給へる也。もとより居給ひたるにはあらず。さて女君の対面し給はぬ故に、和琴を引さび給ふ也。  
あづまをすがかきて

●**釈**「あづま」とは和琴の事也。  
●**新**案に、「すがかき」は、「双」の音を「すが」といふ也。片挿てふに對へてもしるく、且双六を「すぐろく」といへる例をもおもへば也。  
ひたちにはたをこそつくれ

●**玉**風俗常陸歌「比太知仁波、太平己曾川久礼、安太己々呂、可奴止也支見加、山乎己衣、乃乎己衣、安未与支未世留」。これは常陸なる女の、となりの国などより通ひ来たる男によみかけたるにて、歌の意は、我は田を作りてこそ居れ、他事はなきに、もし君がきまさぬ間に、あだ心ありて、他男をかねて通はすかと疑ひやし給ふらん、野山をこえて、かかる雨夜に来ませる、とよめる也。さて今源氏君のうたひ給へるは、我は此常陸の女の「田をこそつくれ」とよめるごとく、あだ心はなきに、あだ心ありとおぼすにや、葵上のとみにも対面し給はぬことよ、といふ意にて也。注に「末摘花の事」とあるは、いと物どほく、ここによしなきこと也。

りへてのちや、さるべき御すぐせ、のがれ聞え給はぬやうもあらん。  
経後 然 宿世 通

ただいまは、かけてもいとにげなき御事と見奉るを、あやしうおぼ  
カリニモ 似合 フシギニ△源ノ

しの給はするも、いかなる御心にか、おもひよるかたなうみだれ侍  
おもひよるかたなうみだれ侍

る。けふもみやわたらせ給ひて、うしろやすくつかうまつれ。心を  
父舎 キツカハシゲナク  
アンシンズルヤウニ ムフ

さなくもてなし聞ゆるな、との給はせつるも、いとわづらはしう、  
△オモモヒ  
① ココロヅカヒニ

●**孟**ただなるよりは、かかる御すきごと、思ひいでられ侍りつる、な  
② ヒトホリ 好色 ③

●**孟**いひて、此人も事ありがほにや思はん、などあいなければ、いた  
惟光 サウ キガオカルレバ

うなげかしげにもいひなさず。たいふもいかなることにかあらん、  
メイワクサウ コレミツ \*大夫

と心得がたく思ふ。参りてありさまなど聞えければ、あはれにおぼ  
\*惟光 カヘリ △カシコノ 源

しやられると、さてかよひ給はんも、さすがにそぞろなるここちし  
サウシテ ソコツラシイ

て、かるがろしうもてひがめたること、と人もやもりきかん、など  
イイル 軽々々々 イヒトナシ

つつましかれば、ただむかへてんとおもほす。御文はたびたび奉れ  
ナニブン 迎

給ふ。くるればれいのたいふをぞたてまつれ給ふ。さはる事どもの  
暮 コレミツ 文の詞 障

ありて、えまありこぬを、おろかにやなどあり。宮よりあすにはか  
△オホサン 明 日 俄 \*少納言など詞

に御むかへに、との給はせたりつれば、心あわたたしくてなん。と  
迎 △オホセン イソガシク 年

おもひみだれて、とことづくになにいひて、をさをさあへしらはす、  
△侍ヒ 言 寡 アンマリ

物ぬひいとなむけはひなどしるければ、参りぬ。君は大殿におはし  
離 營 ソブリ 著 カヘリ

けるに、れいの女君、とみにもたいめんし給はず。ものむつかしう  
葵上 サツソク コメンダウシク

おぼえ給ひて、あづまをすががきて、ひたちには田をこそつくれ、  
東 琴 \* 侍

をさなき人をぬすみ云々

玉かの宮にわたりて後に、むかへ出たらはぬすみ出たりと、よの人にいはるべし、さらばかしこへわたらぬさまに、と也云々。

車のさうぞくさながら

湖師けふ大殿へ乗用の車のさうぞくをそのままおき侍れ、あかつきの方へおはせんと、惟光にのたまふ也。

釈「さながら」といふ詞をおもふに、右の説よろしきか。細流・弄花などに「とりつくろふべき事と惟光思ふべければ」とあるはいかが也。おきてたれ

玉「掟てあれ」にて、掟よといふこと也。聞えありて

釈「世の聞え」といふ意にて、世評のこと也。人のほどたに云々

岷紫上、心などかはすほどの女ならば、かやうにむかへどり給ふもつねの事なればくるしからず、これは年齢のつかはしからぬを、いかがと思ひ給ふ也。

釈「おしはかられぬべくは」とは、大かたの世人の推量すべくは、との意也。

といふ歌を、こゑはいとなまめきて、すさびる給へり。まゐりたれ惟光

ば、めしよせてありさまとひ給ふ。しかしかなんと聞ゆれば、くち源

をしようおぼして、かの宮にわたりなば、わざとむかへいでんも、す迎

きずきしかるべし。をさなき人をぬすみいでたり、ともどきおひな盗出 不評判

んそのさきに、しばし人にもくちがためて、わたしん、とおぼしイナギ

て、あかつきかしこに物せん。車のさうぞくさながら、ずぬじんひ詞 曉 更 紫ノ方へ

とりふたりおほせおきてたれ、との給ふ。うけ給はりてたちぬ。君一人 二人 令 掟

はいかにせまし。聞えありて、すきがましきやうなるべき事。人のウハキラシイ

ほどだに物を思ひしり、女の心かよはしける事、とおしはかられぬイをナシ 通

べくは、よのつねなり。父宮のたづねいで給へらんも、はしたなうツウレイ

すずるなるべきを、とおぼしみだるれど、さてはづしてんは、いとソコツ トリハツシ

くちをしかるべければ、まだ夜ふかういで給ふ。女君れいのしづしザンネンナ 葵上

ぶに、心もとけず物し給ふ。かしこにいとせちに見るべき事の侍る源詞 源 アリシ

を、思ひ給へいでてなん、立かへりまゐりきなん、とて出給へば、△チキニ

さぶらふ人々もしらざりけり。我御かたにて、御なほしなどは奉る。女房下 直衣

惟光ばかりを馬にのせておはしぬ。かどうちたたかせ給へば、心も門 令 蔽

しらぬもののあけたるに、御車をやをらひきいれさせて、たいふつソコツ コレミツ

まどをならして、しはぶけは、少納言ききしりて、いできたり。こ妻戸 鳴 咳

こにおはしますといへば、をさなき人は御どのごもりてなん。など△惟光上

かいとよふかうは、たちいでさせ給へる、と物のたよりの思ひていイはたちナシ

をさなき人をぬすみ云々

玉かの宮にわたりて後に、むかへ出たらはぬすみ出たりと、よの人にいはるべし、さらばかしこへわたらぬさまに、と也云々。

車のさうぞくさながら

湖師けふ大殿へ乗用の車のさうぞくをそのままおき侍れ、あかつきの方へおはせんと、惟光にのたまふ也。

釈「さながら」といふ詞をおもふに、右の説よろしきか。細流・弄花などに「とりつくろふべき事と惟光思ふべければ」とあるはいかが也。おきてたれ

玉「掟てあれ」にて、掟よといふこと也。聞えありて

釈「世の聞え」といふ意にて、世評のこと也。人のほどたに云々

岷紫上、心などかはすほどの女ならば、かやうにむかへどり給ふもつねの事なればくるしからず、これは年齢のつかはしからぬを、いかがと思ひ給ふ也。

釈「おしはかられぬべくは」とは、大かたの世人の推量すべくは、との意也。

女君れいの

釈上文を結びたる照応、いとめでたし。

いとせちに見るべき事

湖「かしこ」は二条院也。かの方に源の見給はでかなはぬ事あるを失念し給ひて、今思ひ出給へば御出あるぞ、となり云々。

我御かたにて

孟「大殿のうちにて、源の御休所なり。」

惟光ばかりを

湖「忍び給ふさま也。」

心もしらぬもの

孟源の御出としらぬ者の門を明たれば、御車を入らるる也。釈心もえぬ者のあけたる故に、御車をひそかに引入させて、惟光みづから妻戸を鳴してしはぶく也。皆源氏君としらすまじき用意也。

こにおはしますと

釈源氏君の此所におはすといふ也。

ものたよりの思ひていふ

細いづくよりその御朝がへりなるべしと少納言は思ふ也。

宮へわたらせ給へかなるを

〔釈〕父宮の方へわたらせ給ふと聞て、其さきに一言いひおくべき事有て来れり、との給ふ也。

いかにはかばかしき云々

〔玉〕「いかに」は「さぞ」といふ意にて、さぞはかばかしき御返事あるべきと、たはふれていふ也。「打わらひて」とあるにてしるべし。いかにをいかでかといふ意に見るはわろし。すべて近世の歌に「さぞ」とよむを、古の歌文には皆「いかに」といへり。心得おくべし。

かたはらいたく

〔釈〕あやしきふるごたちどものうちとけたるが傍かたがはいたき意也。

かかる朝霧をば云々

〔玉〕すべて夜半も過れば、夜の内ながらも朝といふは常の事也。古今集あふみぶりの歌に、「近江より朝立くれば」といひて、とちめに「明ぬ此夜は」とよめるなどにてもしるべし。

〔釈〕「や」はおどろく声也。内の女房などもおどろきながら、さすがにやともえいはぬ也。

御ぐしかきつくるひ

〔釈〕源氏君、紫上の髪をかきつくるひ給ふ也。

宮の御使にて

〔釈〕父宮のかたへわたし奉らんといふよしを聞給ひしからに、「宮の御つかひ」といひなし給ふなり。しかの給へるを紫の聞給ひて、「宮にてはあらず」とあきれ給ふ也。

まるも同じ人ぞ

〔玉〕宮と同じことぞ、かはる事なし、と也。

たいふせつなごんなどは

〔釈〕大夫は惟光也。諸抄に「女房の名也」といはれたるはわろし。惟光もかくまでにはし給ふまじく思ひよりたるならめば、驚くべきなり。箋に「惟光この所まで参りよるべからず」などいはれたれど、「いで給へば」とあれば、それも難なし。

心うくわたり給ふ

〔釈〕兵部卿宮のかたへわたり給ふ也。「まして」は、ここにだにも常にはえ参らぬに、まして宮へわたり給はは聞えかたし、といふ意也。

宮のわたらせ給はんには

〔釈〕父君の来り給はは何とか申すべき、申わけなし、といふ意也。

さるべきにおはしませ

〔釈〕宿縁おはしませば、ほどへても自然にいかやうともなり侍らん、といふ也。

思ひやりなきほどの事に

〔玉〕あまり俄にて、何の用意思案もなき事なれば、といふ也。

さふらふ人々

〔釈〕紫上の女房達也。

よし後にも人は云々

〔湖師〕源氏、少納言が詞は聞もいれ給はず、よし紫の供には跡からなりともまあれ、とて紫を車にのせ給ふなり。

〔評〕事きふになりて問答もなく出ゆき給ふさまなど、げにいとよくうつされたりといふべし。

ふ。宮へわたらせ給ふべかなるを、其さきにも源詞のひとこと聞えさせ已前。

おかんとてなん、との給へば、なにごとにか侍らん。いかにはかば少納言詞。

かしき御いらへ、聞えさせ給はん、とてうちわらひてみたり。君い答。

り給へば、いとかたはらいたく、うちとけて、あやしきふる人ども少納言。

の侍るに、と聞えさす。まだおどろい給はじな。いで御めさまし聞源詞。

えん。かかる朝入玉ハバぎりをしらで、いぬるものか、とて入給へば、やとセイメイワク。

もえ聞えず。君はなに、心もなくね給へるを、いイッだきおどろかし給ふ紫上。

におどろきて、宮の御むかへにおはしたる、とねおびれておぼした抱。

り。御ぐしかきつくるひなどし給ひて、い源詞ざ給へ。宮の御つかひにサアオイデ。

て参りきつるぞ、とのたまふに、あ紫らざりけり、とあきれて、おそ△宮ニテ。

ろしと思ひたれば、あ源詞な心う。まるもおなじ人ぞ、とてかきい抱だき

て出給へば、たいふ少納言などは、こイなどはいかにと聞ゆ。ここにはつ源詞。

ねにもえ参らぬが、おほつかなければ、心やすき所に、と聞えしを、△ムカヘン

心△宮うくわたり給ふべかなれば、まして聞えがたかるべければ。人ひ△迎ヘテラ也。

とりまぬられよかし、との給へば、心少なごんあわたたくて、けふはいと詞

びんなくなん侍るべき。宮のわたらせ給はんには、いかさまにか聞マ

えやらむ。おのづからほどへて、さ△宿縁るべきにおはしませば、ともかガケナイクラキ

うも侍りなんを、いと思ひやりなきほどのことに侍れば、さ△玉ハハぶら侍ふ

人々くるしう侍るべし、と聞ゆれば、よしのちにも人はまぬりなん＊源詞

かし、とて御車よせさせ給へば、あ少なごんなどさましういかさまにか、と思ひ△ツ玉ハハ

よべぬひし御そども云々

〔湖〕上に「物ぬひいとなむけはひしるければ」とありし首尾也。

〔評〕かくあわたたしき中に、「よべぬひし」といひ、「みづからも、よろしき衣着かへて」といへる、いともいともすきまなき事といふべし。ひきさげて

〔玉〕拾遺に「蜻蛉日記に『ず引かけ経ひきさげ』」などあり。提の字にて、ただ取て持也」といへるがごとし。

にしのたいに

〔院〕の西の方なる対の屋なり。対は母屋に対して建たる屋をいふ。わか君をば云々

〔積〕上に「かきいだきて出給へば」とありし首尾。

やすらへば

〔積〕車よりおりかねてやすらふ也。「やすらふ」は、躊躇する也。少納言がさま、見るがごとし。

そは心なり

〔積〕案に、「心なり」とは、「夢のこちし侍るを」といふにこたへて、「それは心から也」とのたまへる也。諸抄に「心まかせ也」とやうにあるはたがへり。そのことは次に見えれば也。

御みづからは云々

〔積〕少納言の車よりおりかねたるを見給ひて、紫の御身をばかくわたし奉りたれば、其方ほかへらんとならば帰れよ、おくらせん、とのたまふ也。「おくり」は体言にて、一つのわざとしていへる語也。

わりなくて

〔積〕少納言わりなしと思へど、せんかたなくて、車より下る也。にはかにあさまじう

〔積〕俄に興さめて、むなさわぎするよし也。「俄に」といへる、めでたし。とてもかくても云々

〔積〕かなたを思ひ、こなたをおもひ、つひにはみなしごとなり給へるを歎きたる女の心、画けるがごとし。「たのもしき人々」は、尼君・母上など也。「いみじさ」は、不仕合といふ意に聞ゆ。

さすがにゆゆしければ

〔岷〕今事の始と思ひていましきと堪忍したる也。

〔評〕此一句いじめでたし。例のかゆき所へ手のとどきたる文勢なり。こなたはすみ給はぬたい

〔湖〕源、常は東の対に住給ふ也。ここは西の対也。

御丁御屏風など

〔積〕御丁御屏風など、よきさまにかまへて建ること也。「したて」とは、こしらへ立といはんがごとし。旧注よしなき論あり、ひがこと也。丁は帳の仮字也。

御木丁のかたびら

〔玉〕御木丁おましなどはここにもとより有て、ただかたびらを引おろせばよく、引つくるへばよきさまにてある也。

ひんがしのたいに

〔積〕東の対の常の御坐所へ衾などとり遣はして寝給ふ也。「とのゐ物」とは、今の世に夜着といふものの類なり。

今はさは

〔積〕今よりはさやうに少納言とはね給ふまじきものぞ、とをしへ給ふ也。

あへり。わかぎみも、あやしとおもほしてない給ふ。( ) 少納言と

どめ聞えんかたなければ、よべぬひし御そどもひきさげて、みづか

らも、よろしききぬきかへてのりぬ。二条院はちかければ、まだあ

かうならぬほどにおはして、にしのたいに御くるまよせており給ふ。

わか君をば、いとかわららかに、かきいだきておろし給ふ。少納言猶

いと夢のこちし侍るを、いかにし侍るべき事にか、とてやすらへ

ば、そは心なり。御身づからはわたし奉りつれば、かへりなんと

あらばおくりせんかし、との給ふに、わりなくておりぬ。にはかに

あさまじう、むねもしづかならず。宮のおぼしのたまはんこと、い

かになりはて給ふべき、御ありさまにか。とてもかくても、たのも

しき人々に、おくれ聞え給へるがいみじさ、と思ふに、涙のとどま

らぬを、さすがにゆゆしければ、ねんじゐたり。こなたはすみ給は

ぬたいなれば、御帳などもなかりけり。惟光めして、御丁御屏風な

ど、あたりあたりしたてさせ給ふ。御几丁のかたびらひきおろし、

おましなど、ただひきつくるふばかりにてあれば、ひんがしのたい

に、御どのゐものめしにつかはして、おほとのごもりぬ。わか君い

とむくつけう、いかにする事ならん、とふるはれ給へど、さすがに

こゑたててもえなき給はず。少納言がもどにねん、との給ふ声いと

わかし。今はさはおほとのごもるまじきぞよ、とをしへ聞え給へば、

いとわびしくてなきふし給へり。めのとほうちもふされず、物もお

あけゆくままに見わたせば

〔湖前〕「まだあかうならぬほどにおはしぬ」とある首尾也。

庭のすなごも

〔評〕此一句にて二条院のいみじきをきかせたる、いとめでたし。

はしたなく思ひるたれど

〔釈〕少納言かやうの所にて交らはんは不都合なることと思ひるたれど、女房などは侍らはず、男ばかり簾の外にあるを見て、少し安心したるさま也。

うときまらうとなどの

〔釈〕女房の侍らはぬ故をことわる也。

ほのきく人は

〔釈〕これは簾の外の男の中にて、ほのかに此事をききし人は、といふ意也。たれならん

〔釈〕むかへ給へる女は誰人ならん、源氏君の迎へ給ふほどならばおぼろけの人にはあらじ、と評する也。

御かゆ

〔釈〕粥は朝飯の外也。昔は二度の飯の外に、朝はかゆなど参りし也。

〔余和名抄〕唐韻云、饘ハ和名加太賀由、厚粥也」と有て、今の人の朝夕米を煮て食する、是也。飯とは蒸籠にてむしたるを云。

さるべき人々

〔細〕故郷の人をめす也。

夕づけてこそは

〔釈〕「夕づけて」は、夕へにつきての意也。ひるは人めを憚り給ふとなるべし。

ちひさきかぎりことさらには

〔玉〕「ことさらには」は、俗にいふ「わざと」にて、わざと小き童ばかりといふこと也。

君は御そにまとはれて

〔釈〕源氏君の御衣にまとはれてふし給へるなるべし。

かう心うくなおはせそ

〔釈〕上に「なきふし給へり」とあれば、猶うちとけずしてゐ給ふなるべし。故に「心うくなおはせそ」とのたまへる也。

すずろなる人は

〔釈〕此語少しまぎらはしけれど、案に、「人」は源氏君なるべし。我すずろなる人ならば、かうむかへきて心をつくさんや、といふ意と見るべし。今よりをしへ聞え給ふ

〔湖前〕

「心のままに、おふしたてて見ばやおもほす」と有。また「いふかひなのけはひや。さりとも、いとよくをしへてんとおぼす」と有。

御かたちは

〔玉〕これは上下の言のつづきさま、源氏君の御かたちをいへるやうにも聞えたり。

〔玉補〕

下への詞つづきのさま、誠に源氏君の御かたちをいへるやうに聞えたれど、これは必紫の上の御かたちをいふべき所也。されば「きよらにて」の下に落たる詞などあるべし。

〔釈〕此二説何れよからん、弁へがたけれど、かくながらにては源氏君の御かたちと見んより外はなければ、暫く小櫛にしたがふべくや。

をかしき絵

〔釈〕絵の脈。

見給ふにび色の

〔玉〕にもじを上へつけて見る説はひがこと也。さてはにといふ言どのはず。

〔河〕

紫上外祖母の服を着する也。ひんがしのたいに

〔細〕源の東の対のわが御方へ出給ふ其間に、紫上の立いで給ふ也。

ぼえずなきみたり。あけゆくままにみわたせば、おとどのつくりぎ

〔明〕

〔大殿〕

〔造〕

ま、しつらびさま、さらにもいはず、庭のすなごも、玉をかさねた

〔飾〕

〔イフニモオヨバズ〕

〔累〕

らんやうに見えて、かがやくこちするに、はしたなく思ひるたれ

〔羅〕

〔砂〕

ど、こなたには、女房などもさぶらはざりけり。うときまらうと

〔西ノ対〕

〔侍〕

〔疎〕

〔客人〕

どのまゐるをりふしのかたなりければ、をどこどもぞみすのどに有

〔イのナシ〕

〔男子〕

〔外〕

ける。かく人むかへ給へり、とほのきく人は、たれならん、おぼろ

〔イほのナシ〕

〔内ノ衆也〕

〔ヒトトホ〕

けにはあらじとささめく。御てうづ御かゆなどこなたにまゐる。日

〔ササヤク〕

〔手水〕

〔粥〕

〔マキラス〕

たかうおき給ひて、人なくてあしかめるを、さるべき人々夕づけて

〔高〕

〔起〕

〔ン〕

〔然〕

〔附〕

こそはむかへさせ給はめ、との給ひて、たいにわらはべめしにつか

〔東ノ対〕

〔童女〕

〔召〕

はず。ちひさきかぎりことさらまゐれ、とありければ、いとをか

〔少〕

〔バカリベツタンニ〕

〔ウツク〕

しげにて、四人参りたり。君は御そにまとはれてふし給へるを、せ

〔シゲ〕

〔紫衣〕

〔イにシ〕

めておこして、かう心うくなおはせそ。すずろなる人は、かうは有

〔ヒテ〕

〔起〕

〔ツラク〕

〔ムサトシタル〕

〔如此〕

なんや。女は心やはらかなるなんよきなど、今よりをしへ聞え給ふ。

〔柔和〕

〔ハヤカラ〕

御かたちは、さしはなれて見しよりも、いみじうきよらにて、なつ

〔△紫ノ〕

〔△近クテ△〕

〔浄〕

かしう打かたらひつつ、をかしき絵、あそび物ども、とりにつかは

〔\*〕

〔取〕

して見せ奉り、御心につくべき事どもをし給ふ。( )。やうやうおき

〔△紫ノ〕

〔紫〕

〔ソロソロ〕

いでて見給ふ。にび色のこまやかなるが、うちなえたるどもをき給

〔イみて〕

〔\*〕

〔鈍〕

〔ウツクシキ〕

〔イ給着〕

ひて、何心なく、うちゑみなどしてゐ給へるが、いとつつくしきに、

〔ひナシ〕

われも打ゑまれて見給ふ。ひんがしのたいにわたり給へるに、たち

〔源〕

〔東〕

〔△源ノ〕

〔紫〕

いでて、庭のこたち、池のかたなどのぞき給へば、霜がれの前栽、

〔木立〕

〔方〕

四位五位こきませに

〔河〕古今見渡せば柳桜をこきませて都ぞ春のにしきなりける。〔み雪ふるかすがの原のさくら花えこそ見わかぬこきませにして

〔紫〕上、尼君の方にては見しり給はぬ四位五位どもひまなく出入するを、めづらしと見給ふ也。〔こきませに〕とは、四位の紫袍、五位の赤袍たちまじりたるを云。かの「柳さくらをこきませて」といふ類なり。こきは「かき」といふに等しく、手して物するに力のいる詞を発語の勢ひにそへたるのみ也。

〔新〕こは三位も六位も七位もいろいろ出入べきなれど、さまで出ては文の拙き故に、略して「四位五位」とのみ書しもの也。〔こきませ〕といひたるにてしるべし。

出入つ

〔紫〕此下にもしくは詞落たるか。「のぞき給へば」とあるはもじの結びあらまほしき所なり。

御屏風どもなど云々

〔紫〕上に屏風の事見ゆ。などといへるは、其他取につかはしたる画までをいへる也。「はかなし」と評したる詞、例のめでたし。

やがて本にもと

〔紫〕すぐに御手本にもし給へとおぼすにや、と也。

むさし野といへば

〔河〕しらねどもむさし野といへばかこたれぬよしやさこそはむらさきのゆゑ。

余六帖卷五。

〔細〕藤壺の御ゆかりと也。

墨つきのいとことなるぞ

〔紫〕紫のゆかりの事かき給へるなれば、墨つきも心してかき給ふべければ、ことなるべし。

すこしちひさくて

〔湖〕歌の書きま也。

ねはみねと云々

〔花草の「根」を「寝」る心によめる也。業平中将、妹に対してよめる歌、うらわかみねよげに見ゆるわか草を人の結ばんことをしぞ思ふ、この「ねよげ」も「根」を「寝」にそへたる也。

〔岷〕「露わけわぶる」は藤壺の事なるべし。

〔紫〕いまだ寝は見ねどあはれとぞ思ふ、あひがたき藤つぼの御ゆかりなれば、と也。「露分わぶる」は逢がたき心、「草」は紫草なり。

よからねど

〔孟〕わろくともかき給はぬよりは、と也。

うちそばみて

〔紫〕はじらひて側向になりてかき給ふ也。

心ながらあやし

〔紫〕源氏君、わが御心ながらかくまで紫上にこころうつり給ふはあやしく不思議なり、とおぼす也。

かこつべき云々

〔花〕かこつべき故もなき身にむさしの若むらさきをなにかくらん〔紫〕むさし野といへばかこたれぬ」とあるをうけて、我をかこつべきゆゑをしらねばおぼつかなし、「露わけわぶる草のゆかり」とはいかなる草のゆかりぞ、と也。

ふくよかに

〔玉〕「ふくらか」にて、ただをさなき人の書たるさま也。旧注に「大やうなる手」といへるはわろし。其意はなし。「おひさき見えて」といふは、「ふくよか」へかかれることにはあらず。

今めかしき手本ならば

〔玉〕尼公の手は古風にて、今の風にはあらざるが、今より後、今めかしき手本をならば、の意にていへるなり。

ひいなと也

〔紫〕ひいなの脈。

やと也

〔紫〕ひいな屋どもを造りつづけなどし給ふ也。ひいなの人るべき屋の形したるをいふなるべし。

こよなき物思ひの

〔花〕藤つぼの御事也。ゆかりを尋ね出て思ひなぐさみ給ふ也。かのとまりにし人々は

〔細〕是より故郷の事也。

〔紫〕故郷にとまりし女房たち也。

糸にかけるやうにおもしろくて、見もしらぬ四位五位こきませに、

ひまなういでいりつつ、げにをかき所かなとおぼす。御屏風ども

ナルホドオモシロキ

など、いとをかき絵をみつ、なぐさめておはするもはかなしや。

△心ヲ

君は二三日内へもまゐり給はで、この人をなづけかたらひ聞え給ふ。

源氏

禁中

イ聞えナシ

やがてほんにもとおぼすにや、手ならひ絵など、さまさまにかきつ

\*本 イにと

△ツ玉

つ見せ奉り給ふ。いみじうをかしげにかきあつめ給へり。むさし

集

野といへばかこたれぬ、とむらさきのかみにかい給へる、すみつき

紙

の、いとことなるをとりて見ぬ給へり。すこしちひさくて、

イのナシ

別

△紫

ねはみねどあはれとぞおもふむさしの露わけわぶる草のゆかり

\*源

を、とあり。いで君もかい給へ、とあれば、まだようはかかず、と

源詞

ドレ

紫詞

能

て見あげ給へるが、なに心なくうつくしげなれば、うちほゑみて、

上

美

源

よからねど、むげにかかぬこそわろけれ。をしへ聞えんかし、

\*詞

一向二

教

との給へば、うちそばみてかい給ふ。てつき、筆とり給へるさまの、

\*紫

をさなげなるもらうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしとおぼす。

カハユラシウ

フシキナ

かきそこなひつ、とはちてかくし給ふを、しひて見給へば、

損

恥

隠

かこつべきゆゑをしらねばおぼつかないかなる草のゆかりなるら

\*紫

ん、といとわかけれど、おひさきみえて、ふくよかにかい給へり。

幼

\*フトヤカ

こあま君のにぞにたりける。いまめかしき手本ならば、いとよう

故

尼

△手

似

\*タウセイフウノ

イならば

かい給ひてんと見給ふ。ひいななど、わざとやどもつくりつづけ、

離

屋

造

統

もろともにあそびつつ、こよなき物思ひのまぎらはしなり。かのと

遊

\*カクベツナ

△古郷三

しばし人にしらせじと

湖前に「しばし人にもちがためて、わたしでん、とおぼす」と有し首尾也。

くちがためやりつつ

二条院へといふ事をないひそ、と口かためして、紫の故郷へやる也。

かしこに

秋父宮の御かたに紫上のわたり給はんことを也。

さしすくしたる心ばせの

秋少納言がさし過たる心の余りに、紫上を父宮のかたへわたさんを、便なしなど尋常にはいはずして、心にまかせてゐてゆきしならん、となり。「おいらかに」は、いはでへかかる意也。「おいらかにわたさん」といふ意にてはなし。

もし聞出奉らば云々

秋湖月にこれを、兵部卿宮の里の衆につげ置給ふ詞として、「わづらはしく」といふを「跡に残れる人々の心也」といへるは、まことにさることなれど、さては「わづらはしく」とあるくもじ切らずして、とどまる所なし。かれ案に、これは宮の御心にて、「もし聞出奉らば告よ」と里の人々にのたまふもわづらはしくて、さもえのたまはぬ意かとも思へど、猶穩かならず。しばらく湖月の意として、かりにくもじを削りつ。かくては聞ゆべし。

あとはかなくて

玉僧都のもとへ尋ね給ひても、さらにゆくへしられぬよし也。

北方も母君を云々

秋兵部卿宮の北方も、紫上の母君をにくしと思ひ給ひける心も今はうせて、紫上をばわが心にまかせておふしたてんとおぼしけるに、事たがひければくちをしくおぼす、と也。

やうやう人参りあつまりぬ

細是より又二条院の事なり。

秋「参りあつまる」は、故郷よりも其外よりも参りしなるべし。故郷よりとのみかぎりたる注は、わろし。御遊びがたきのわらはべ・ちごどもも、此うちと見るべし。上にはただ「四人」とあれば、其後に又々多く参りたりとすべし。

もとより見ならひ聞え給はで

秋これは父宮をば殊に思ひいで聞え給はぬゆゑをことわる文也。甲乙の点のごとく心得べし。宮とはわかれておひ立給へれば殊に思ひ出給はぬ、と也。

のちのおやを

秋源氏君なることは論なし。上に「かの過給ひにけん御かはりに、おぼしないてんや」と有し脈を失はずして、後の親といへる、いとをかし。物よりおはすれば

湖源氏外よりかへり給へは也。

まりにし人々は、宮わたり給ひて、たづね聞え給ひけるに、聞えやイ

女房ナド

兵部卿

△紫上

マウシア

らんかたなくてぞ、わびあへりける。しばし人にしらせじ、と君もヤル

ケン

コマリ

チトノマ

源

のたまひ、少納言も思ふ事なれば、せちにくちがためやりつつ、たイたり

ネンゴロ

口禁

だゆくへもしらず。少納言がゐてかくし聞えたる、とのみ聞えさず行方

行方

率

バカリイハスル

るに、宮もいふかひなうおぼして、こあま君も、かしこにわたり給故

宮

△紫上

はん事を、いとものしとおぼしたりしことなれば、めのとのいときイのナシ

イカガシイ

しすくしたる心ばせのあまり、おいらかに、わたさんをびんなしなデス

ギタ

キマヘ

シンジヤウニ

△宮

フツガフナ

どはいはで、心にまかせて、ゐてはぶらかしつるなめり、となくな△口方

△口方

率

放流

ノトメル

くかへり給ひぬ。もしきき出奉らばつげよ、との給ふもわづらはし。告

\*

告

コムツカシ

く僧都の御もともたづね聞え給へど、あとはかなくて、あたら可

可

惜

しかりし御かたちなど、恋しくかなしとおぼす。北のかたも、母君容

容

宮ノ北方也

紫上母君也

をにくしと思ひ聞え給ひける心もうせて、我心にまかせ給ひつべう失

失

おもほしけるに、たがひぬるはくちをしうおぼしけり◎やうやう人ザンネンニ

ザンネンニ

次第次第ニ

まゐりあつまりぬ。御あそびがたきのわらはべちごども、いとめづ集

集

アビテ

童女

小兒

らかにいまめかしき、御ありさまどもなれば、思ふことなくて、あタウセイフウナ

タウセイフウナ

△源紫上

そびあへり。君は男君のおはせずなどして、さうざうしき夕ぐれな紫

紫

モノサビシイ

どばかりぞ、尼君をこひ聞え給ひて、うちなきなどし給へど、宮を◎全文

恋

◎全文

ばことに思ひ出聞え給はず。もとよりみならひ聞え給はで、ならひ殊

殊

ミナシ

ナレ

給へれば、今はただこの後のおやを、いみじうむつびまつはし聞え源氏

源氏

源氏

睦

繼

給ふ。物よりおはすれば、まづ出むかひて、あはれに打かたらひ、先

先

向

さるかたには

〔釈〕「さるかた」とは、もてあそびものにし給ふ方には、との意なり。此次よりは、さるかたにらうたきよしを委しく述る文也。

さかしら心あり云々

〔湖師〕「さかしら心」は、嫉妬などのかたをいふ也。「わが心ち」とは、男の心をいふ。「人もうらみがち」とは、女をいふなり。

〔釈〕年たけてまことの夫婦とならんに、もしさかしら心ありて、むつかしきすぢにねたみなどせば、我心にもたがふ事も出来やせんと心もおかるとべし、さらば、女がたも恨みがちになりて、案外の事も自然といでんを、今はまださることもなければ、をかしき翫び物也、といふ意なるべし。

むすめなどはた

〔釈〕まことの娘などは、かほどの年ごろになれば、かく心やすくふるまひて、懐に入、もろともいふしなどへだてなきさまにはえすまじきに、これはつひに夫婦となるべき人なれば、さまかはりたるかしづき種とおぼすよしなり。

これはいとさまかはりたる云々

〔玉〕これはまことのむすめとはさまかはりたるかしづきぐさぞ、と也。注に「よのつねの夫婦のかたらひのやうにもあらず云々」と、夫婦の事へもかけていへるはわるし。「かしづきぐさ」とは、もはらむすめにつきていふ詞也。夫婦のかたのさまかはりたることは、「いとをかしきもてあそびぐさ」とすでに上にいひて、ここへはかからぬ事也。

〔釈〕この物語、卷々の末をさまぎまに体をかへて結ばれたる中に、此卷なるは、源氏君の、紫上をかしづくにつけておぼしたることをいひて、はかなくとぢめられたり。次の末摘花巻の末に、「二条院におはしたれば、むらさきの君いともうつくしきかたおひにて云々、とある所へつぎて心得べし。かしこにて紫とくれなると反対にしたる脈をひき、すべて結びたるなり。

御ふどころにいりぬて、いささかうとくはづかしともおもひたらず。

懐 入 居 チ ッ ト モ 疎

〔\*〕さるかたには、いみじうらうたきわざなりけり。さかしら心あり、

ソノ方ニハ

イハナシ

なにくれとむつかしきすぢになりぬれば、わが心ちもすこしたがつ

コメンダウナ

源

△今下△

ふしもいでくや、とこころおかれ、人もうらみがちに、思ひのほか

出 来

キ ガ オ カ レ 紫

の事も、おのづからいでくるを、いとをかしきもてあそびなり。む

自 然 ト

モナル方△只今△

息

すめなどはた、かばかりになりぬれば、心やすくうちふるまひ、へ

女

モマタ

コレホド

イなれば

だてなきさまにおきふしなどは、えしもすまじきを、これはいとさ

隔 心

為

紫 上

まかはりたるかしづきぐさなり、とおぼいためり。

様 変

モテアツカヒ

種